

第Ⅴ期

— 「思考力」が「**人間の価値**」を不動にする —

高次元経営(信頼の組織)への パラダイムチェンジ
— 「機械論パラダイム」から「有機体システム思考」へ —

第6講

新しい価値を創造する「システム思考」の確立

令和6年10月19日

講師：楠本浩之

主催：一般社団法人 日本的経営研究会

経営人間学講座 道場清規

一、経営とは、経世済民の高い志しを、実行に移すことである。

一、経営とは、人間の究極の理想と目的を、実業の現場で実現することである。

一、経営とは、人間のもつ無限にふかい可能性に、確信の信を置き、価値の創造に努めることである。

一、経営とは、人間のもつ最も醜い力を、もつとも美しい価値に、転換させることである。

一、経営とは、いかなる絶望的な境遇にあっても、その中からつねに智慧と力と勇気を、奮い起こすことである。

本日のお話

— 前提話題 —

■若い二人の感想文から、学んだこと。学ぶべきこと。

- ・偶然という名の必然。それを引き起こす(引き寄せる)ものとは…?
(本講義全体を通じての内容です)

- ・「経営者の仕事」を今、本気で考える

全体観をもって、今の環境を受け容れ、今の目の前の仕事(問題)を直視する。

そして、変革する。この事実(行動)を通して、全体(全社)を揺るがす(貢献する)。

■分断された、あらゆる学問の最高にして最先端を学ぶ。 何の為か?

そこから、真の変化を掴む。そして、統合する。

- ・科学と仏教・キリスト教(日本仏教学院・仏教ウェブ入門講座)より
- ・バートランド・ラッセル (この人の心を思う)
- ・「空」と「量子」 共通する宇宙の真理
- ・“世界は「関係性」でできている” カルロ・ロヴェッリ
- ・“時間は存在しない” カルロ・ロヴェッリ
- ・“目覚めよ 日本!” — 新しい地球を創造するために — 越智啓子

— 本 講 —

- ② 「相互共存」の原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58p
- ③ 「相互共存」の原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59p
- [3] 有機体システムがもたらす多様性価値の原理・・・・・・・・・・ 60p
 - ① 「多様性」の原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61p
 - ② 「多様性」の原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62p
 - ③ 「多様性」の原理・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63p

■「本講座」と「経営」との関係(事実)

- ・高次元の講義を…
- ・Kアライアンスの今(日常)の一部開放
- ・週番
- ・顧客への、或る注意喚起。その背景
※見えないものを観る眼 (事実は真実ではない)
- ・私、楠本は竹内日祥お上人様に・・・
- ・竹内日祥お上人様の言葉(高い価値観の学び)について

役職：大学院修士 2 年

氏名：A

年齢：25 歳

性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第 5 期 5 講（前半） 感想文】

楠本代表、准子さん、事務局の皆様、共に学ばせていただいている皆様、今回も高次元経営実践研究会を受講させていただき、心より感謝申し上げます。貴重な学びの場に参加させていただき、ありがとうございます。

留学先についてから、初めての高次元経営実践研究会と言うことで、オンラインであつても受講させていただけます事、また、代表に於かれましては体調が万全ではない中ですが、休憩を取りながらでもお話ししていただき、准子さんや事務局の皆様、に於かれましては、その代表を全力で支えられていることで、このような機会を頂ける事を今一度考えますと、有難さを感じるばかりです。

また別途、報告させていただきますが、新天地で生活し始めてわずか数週間ながら、沢山の感動する体験をさせて頂いております。まるで赤ん坊のような私が、多くの方に支えて頂いている、そして、今までにも多くの方に支えて頂いたことを実感すると共に、贅沢な時間を過ごさせて頂いていると感じる次第です。この留学の中で何か必ず見つかる（ける）、経験を生かして周囲の方を支援されるようになりたい、そんな自分にワクワクしている。そのような確信があります。だからこそ、教えて頂いている事の大切さを何度も、実感しています。“戦っている”という意識があるだろうか。そう問いかけながら、以下に振り返りを書かせていただきます。イブニング・ニュースを拝聴しての事や最近経験したことに関連する学びも多く、全てを書ききれなかった部分もありますので、そちらに関しては別途報告とさせていただきますたいです。

○相手に訊いたらわかると思っている愚かさ

レジュメ 17 ページ 11 行～

では、

敵（相手）に安心を与える為には、一体、何が必要か？

分かりますか？

答えられますか？

それが、

敵（相手）の弱点（困っている所・悩んでいる所・不安な所）を正しく知る

では、【正しく知る】の意は？

- ・これが、またまた殆どの人が分かっていない。

私は分かっていない！私は分からない！と言う確信をしているか？

そうでは無くて、その逆で、**私は分かる。**と、惚けた事を思っている。そして『分かる分かる！』と、そう平気で言っている。その惚けた自分の愚かな姿が見えない。無知。

- ・この惚けは、一体どこから来るのか？？

分かりますか？ 答えられますか？

これは、

「相手に聞いたらわかる」と、思っている。（これが後、失敗の原因になる）

何故そう言えるのか？

分かりますか？ 答えられますか？

それは

・相手も分かっていないからです。（これを、相手は分かっていると思っているから）双方に、お互いが問題特定をするその前提の間違い、からのスタート。

・相手の語る、相手の見える、**相手が認識する問題**（相手の認識とは、相手の価値観による）、その奥にある本質的な問題（高いレベルで認識した問題）を、手探りで特定し、明確にする。

このプロセスを相手と共に歩み、求め、探し、見つける。

今回のご講義での学びの中でも、大きな私の間違いであったのが、「相手に聞いたらわかる」と思っていたことです。そのことを特に、彼女との関わりの中で感じています。ご講義の間に、この言葉を聞いた時からピンと来ていました。それは、お互いの言葉の揚げ足取りをして、喧嘩することが何年にも渡って繰り返されている事態が続いているからです。中でも、過去の振り返りの中であった、思想を彼女に向けて攻撃していたことが思い出されました。

今までも、私は共感的に話を聴こうということを、心の中に留めてきたつもりでした。相

手の価値観を借りて、話したいと思い、まずは相手の話に耳を傾け、なるべく相手の使った言葉を使って、確認していく。相手の使った言葉を使うことによって、本当に相手の思った通りをそのままに受け取りたいし、そのために最善の方法を取っていると思っていたのです。

しかし、それは共感でも何でもなく、ただ言葉を繰り返しているだけでした。だから、第3講の振り返りで書かせていただいたように、彼女と「依存しない」関係についてお互いに泣きながら、午前3時まで話し込んで、最終的にはすっきりしたと感じても、相手は実は気持ちの中に引っ掛かりが残っており、別れる寸前になるまで私は自らの誤りに気付かないといった出来事が最近ありました。また、日常の些細なレベルでも、言葉尻を捉えて喧嘩するなど、似たようなことでの喧嘩を繰り返す状態が何年にも渡って続いています。

また、数年前には、Mと事業の中での問題について話していた時にも、私が問題を起こしてしまったことがありました。問題がかなり繊細な内容であったので、認識を合わせるためにMの話を聴いて、Mの言葉をほとんどそのまま使って整理したつもりになっていたことがあったのですが、何度聞いても違うのです。同じように、Mが使った言葉を使って他の捉え方で整理をしてみてもやっぱり違う。そうならばと、次は、話の途中で逐一、「今のはさっき言っていた〇〇とこういう関係で合ってる？」などと確認していったのですが、それで合っていくどころか、「なんだろう、その聴き方をされるとこっちとしては安心できない」と言われたことがありました。当時はそれがなぜか、全く分からなかったので、どうしたら良いのか、かなり衝撃を受けたことを覚えています。(その当時は思想から離れていた時期でしたので、確認せず放っていました。)

それらの記憶が一瞬で思い返された後に、その前提には「相手が自分のことを完全に分かっていて、間違いなく自分の言葉で表現できている」という暗黙の了解があることに気付かされて、衝撃を受けました。レジュメの空いた部分に大きく、「ここが間違い!!!」と思わず書いていたほどです。自分が他の人に共感するのが下手であるというのは、過去のご講義と振り返りから気付かせていただいていた。でも、「相手も分かっていない」と言うことに関しては、全く疑いも持っていなかった。まさしく、「私は分かる」と盲信していました。言語化を通して、自分自身がいかに関わっているかを痛感していたにもかかわらずの出来事でした。

そのことが分かったと、ただそれだけのことも出来ていなかったと思い、本当に申し訳なくなりました。そして、「相手も分かっていないという前提に立っていないくて、今まで言葉尻だけを捉えて、攻撃してしまっていました。申し訳ないです。」と彼女に謝ると、不思議と彼女も受け入れるだけでなく、自らの行動を振り返ってくれました。今まで、言葉尻を私自

身が気にしていたからこそ、相手も敏感になっていました。だからこそ、私が彼女に言辞を弄して媚び諂う場面や、彼女との関係性の中で波風を立てないように、しばしば敢えてしてきたので息苦しさを感じる時もあったのですが、お互いが同じ問題意識を共有することでスッと肩から力が抜けた瞬間でした。こうなると、今からの新たな関係性が楽しみになっている所になります。これが同じ人との新たな出逢いの入り口かもしれない。そう思えた瞬間になりました。

このように問題意識を共有する重要性について、実感できた振り返りとなりました。

ただし、問題意識を共有しようと高次元経営実践研究会で学んだことを共有する際に、そのまま教わったことを話すと「教わったことそのままではなく、あなたの言葉で話してほしい。あなたの言葉で聞きたい」と言われることが多々あります。この「あなたの言葉で聞きたい」という所に関して、今回ご講義の中でも出てきた場面がありましたので、確認させていただきたいです。 ※お答えします

○V・E・フランクリンについて

最後の数分間お話しいただいた、V・E・フランクリンについてのお話に関しても学びがありました。

講義の中で、ウィーンが V・E・フランクルに大変縁があるところだと伺って、その瞬間に鳥肌が立ちました。と言うのも、日本から持ってきた数冊の本の中に、偶然『夜と霧』があり、ご縁を感じたからになります。ウィーンを留学先に選んだのは、移民や難民について学びたい、という思いからでした。ただし、その他にも、関心のある戦争について、ヨーロッパ諸国を巡りながら学んでみたいという思いもあり、その上でアウシュビッツには必ず行きたいと考えていました。そこで、アウシュビッツまで持っていこうと、日本語版の『夜と霧』を偶然にも講義の前から持参していたのです。

代表から、V・E・フランクルに関してお話を伺った際に、「偶然、縁のある土地でその人となりにより近くで感じられる環境にすることがいかに贅沢なことであるか」、そして、「遠く離れたところからでも、代表をはじめ皆様が見守ってくださること」を感じまして、その有難さに、なにか感動に近いものを覚えました。

そして、昂揚冷めやらぬ間に、講義後、一目散に寮から 10 数分で行ける博物館に駆け込んでいました。生憎、その日はお休みだったので、その日から一番近い開館日に『夜と霧』を一度読んで、訪れることとしました。

著書を一読しての感想は、本当に重たかった。常に死に直面したリアルな人々の様子を描いていて筆舌に尽くし難く、今もよく分かっていないところが沢山あります。それでもとり

あえず分からないなりに、心に残るところはタブレット版も買ってそちらにマーカーを引きながら、最後まで読んで博物館に赴きました。

博物館に入ると、入ってすぐの所に彼の生涯年表とその時々に残した言葉が書かれているコーナーがあります。その言葉の中には、いくつも高次元経営実践研究会で学んだことが含まれていて、それらを発見する度に、感動したんです。詳しくはまた別途、報告いたしますが、第5講の中で紹介されていたOさんの感想文の中にあった言葉にも続きがあることを知りました。以下にその原文を紹介させていただきます。

“It is not we who ask something from life.

It is life itself that is asking something from us.

We should not be asking rather, we are being asked by life.

We are the ones who respond and are responsible.”

日本語に訳すと、

「私たちが人生に何かを問うのではありません。むしろ、人生そのものが私たちに何かを問うています。私たちが問うべきではなく、人生から問われている。私たちは答える存在であり、責任がある存在なのです。」

となりましょうか。

この文を読んだときは、驚きと高次元経営実践研究会で教えて頂いている事が被った感動で、動けませんでした。「人生に問うのではない、人生から問われているのだ。」というだけでなく、「私たちは答える存在であり、責任がある存在なのです。」とまで、実はV・E・フランクリンは言っていたのです。「責任がある」と言っているのですから、そうなのでしょう。「責任を取ること」に真正面から取り組んでいない自分も知っている。だからこそ、心に刺さる言葉でもありました。その一方で、人間（私）は逆に「責任がある存在」なのだから、「責任を取ること」を後押ししてくれているようにも感じています。なんとも、不思議としか言えない気持ちです。

ただし、感動したまでは良いのですが、私の受け止めに自信がありません。そこで、思想の考え方からすると合っているかどうか、確認させていただきたいです。

以上が、今回の振り返りになります。

今回、

- 「危機感」とプロ意識について
- 厳しくて優しい人
- 確認について

ということについての振り返りが間に合いませんでしたので、別途報告させていただきます。

しかし、総じて、ご講義はもちろんのこと、皆様の感想文から勇気を頂いたことは間違いありません。

ただただ、感謝を申し上げます。誠に有り難うございます。

離れた場所からになりますが、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

最後に…

会社名：A合同会社

役職：マネージャー

氏名：K

年齢：24

性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第5期5講前半 感想文】

-感想本文(MS 明朝)-

いつも貴重なご指導の場を頂きありがとうございます。第5期はスタートしてから本当に怒涛のスパンでご指導を頂いている感覚で、自分自身ついていくのに精一杯というか、自分の「水筒」の小ささを認識しているところです。自己と向き合うことで、本当に濃い時間を過ごせる事を実感しています。

だからこそ、講座毎の振り返りを通して自己と向き合い続け、少しでも指導いただいた内容を受け容れることができる自分でありたいと強く思います。同時に、振り返りをする自分と、しない自分を刹那毎にまだまだ切り離していることに気づきました。

今は振り返りをする場があることで開放することを通して支えられていますが、同時に振り返りを本来提出する「場」というのは、自分が日々向き合っている環境に対して、つまり**実業の現場**であるということに気がつきました。つまり、「行動を変えること」が本来の振り返りの提出（アウトプット）で、**そこが統合されている必要がある**ということです。そのことを前提に置いた上で、今回も振り返りを提出させていただきます。

■ 父を尊敬したいと思うこと

9/16に父の誕生日が9/9だったこともあり、福岡に来てくれたので、1泊2日で一緒に時間を過ごしました。今回は、「人生で一度は回らないお鮎を食べてみたい」と父が言っていたこともあり、自分も初めてだし良い人生経験になると思い、会社の詳しい先輩に紹介してもらった良いお店に父を連れていく事ができた会でした。

その前日に、代表夫妻と食事をさせていただいており、父とお鮎に行くこと、これまで行った事がなくて、父が行きたがっているという話をした時に、准子さんから「それは苦勞して育ててくれたんやね〜、感謝しないとね〜」と言うようなことを言われ、その時も泣きそうでしたが、父が実際に回らないお鮎のカウンターで落ち着かない様子でいるのをみて、胸を打たれ涙が出てきました。

自分の原点を忘れていたような、それを父から教えて貰っているような感覚でした。強

がって、見栄張って、そんなことばかりの自分に対して、強烈な情けなさとしり訳なさ、そして、育ててくれたことへの感謝が込み上げてきたのだと振り返っています。

私は会社からバケーションをいただいている期間で、ヨーロッパから帰ってきたところだったので、その新鮮な思い出話をしたり楽しい時間が過ごせましたが、父と二人で長時間を一緒に過ごすとはず話の中心になるのは、兄の話と大谷翔平の話です。

おそらく、大谷翔平が常に前進し革新を続けているという事実と、兄という存在が父と自分のコンテクストの中で、常に新しい認識に変わり続けているからだと思います。

私は、大谷翔平への認識について「彼にとって野球が仕事であること」「大谷翔平の仕事観（野球に取り組む姿勢）と私の仕事に取り組む姿勢が切り離せない事」「そういう点で、野球はしていないが、大谷翔平になれる事」など代表から教えていただき感動したことを話したり、「見えない貸借対照表を意識していること」「私の会社や今の日本・世界が抱えている問題」など短い時間でしたが、沢山のことを父に話しました。

父が分かってくれていることが分かり、その時間が純粋に楽しく、自分の中でも伝えることで深まる、そんな感覚を得ることができた時間でした。

兄の話になった時も、昨年は、「M（兄）はこの世にはいないけど一緒に生きているよな」という言葉が父から出てきたことに感動したというエピソードがありましたが、今年はその言葉を、一層、力強く聞くことになりました。

「M（兄）の辛い出来事に対して親としての悲しさとか、自分の子供の事なのに何も分かっていなかった事を認めざるを得ない事実へのショックとか、そういう親としての罪意識のようなものが消えることはないと思うけど、それ以上に今も理解できない、この消えない事実によって、M（兄）という存在が生きている事をはっきりと確かめることができていく気がする。親としてその（兄という存在の）責任を背負って生きていくということが残りの自分の人生である気がする」というようなことを語っていました。感動しました。

私の大学時代、父はこの出来事に対して、何か他のものに原因を見出そうとしたり、自分を責めたり、沢山の同じ境遇にある親の SNS での嘆きを見て心の慰安を求めたり、深酒をしたり、それらで何も打ち消せない事実の苦しみに、絶望していたのだと思います。そこから、前に踏み出しただけではなく、積極的に残りの人生を進もうとしていることに尊敬の念を持ちました。

同時に、「たまにK（私）に会う度に、俺にとって理解できないような人間になって、そこで生き生きしているのを見てこれが嬉しい事だとも思う」と言われ、ここでは涙が堪えきれなかった気がします。

兄の事を理解できない、分からなかったという私には到底計り知れないショックが、「私のことが理解できない」ことに対しての喜びの要素になっている、その言葉を持って、父は兄の出来事を価値に変えることができているという事実・根拠を私自身が分からされたからです。

また、父との関係性が深くなっている事に対しての兄への感謝も深まり、今の自分がもっと自分らしく、大人になっていく事において躊躇なくいられるのも、兄のおかげなのだろうと思えました。そのような出来事を振り返りながら、講義を拝聴し、以下の部分が引っかかりました。

関係性とは「優しさ」を求める人が最後にたどり着くテーマ

「優しさ」を求める→とは→「信用・信頼」できる人を求めているの意
そして、それは更に「尊敬できる人」を求めているという事
ところが、それが、
誰か、何処かに居と思っていた。
つまり、信用と信頼の根拠は他に、相手に在ると思っていた。

私はもっと父を尊敬できる、愛することができる、そして、そうありたいと感じました。その為には、父に期待するのではなく、思想学習によって高い価値観を学び、その根拠を自分のものにし、父を通してそれを見出すことができる自分になること、そういう点で、「誰か、何処かにはなく、自己にある」という事が分かりました。

また、イブニング・ニュースで「2015 年までに命の危機の出来事があった人は、この乱世で役割を持つ可能性がある」という物理学者の保江邦夫さんの話を聞いた時に、父の交通事故を思い出しました。

2012 年に父は乗っていた車が横転しそのまま 1 回転するような事故に遭っており、父は「1 秒がとんでもなく長く感じる不思議な体験をした」と当時言っていましたが、父にも何かしら役割があるのかもしれないと思いました。そうだとすると、父が役割を確信して人生を全うできるかの責任は自分にあると分かりました。

それを潜在的に自覚していたからか、二人で過ごす時間が感動的なものだったからかは分かりませんが、私は父が目を背けている壁に私自身が踏み込もうと思いました。それは祖父との関係性です。祖父は現在老人ホームにいて、父が面倒を見ている状態ですが、祖父と父の関係性の中に父の向き合うべき壁があるように感じています。

私もこれまで詳しく触れたことはありませんでしたが、父が小さい頃、共産主義的な革命活動に祖父が加担した事をきっかけに、当時小学生だった父は色々な事を強制され、部活も

できず、大学にもいけず、希望を失ったというような話を聞いたことがありました。父はそれによって中高、その先の人生が狂わされたという認識を多少なりとも、今も持っています。

また、その出来事を反面教師にしたから、私立は無理でも、国公立には行けるようにお金を貯めたし、その気持ちがあったから自分と兄を大学まで行かせる事ができた、その責任を果たすことができた、というような話をよくします。それは美談ではなく、私自身は引っかかる場所がありました、父はそうやって正当化したいのだと。

父が祖父から縛られたと感じていたもの、強制されていたもの、そのアンチテーゼ（同次元）に今も縛られ続けている、祖父に自分の人生の責任の所在を置いている。

つまり、自分には分からないけど、なんとなく祖父と向き合い、許してあげる必要があるのではないかな？という事を伝えました。お酒も入っていたし、土足で入ってしまったかなという後悔のようなものもありましたが、コンテクストをとっても、少しメッセージを残すことが出来たのではないかと感じています。 ※これを と言います。

これは、父だけの問題ではなく、私自身の原点でもあるからという事を持ってこれからも自己と向き合い続ける自分であらなくてはいけないと一層強く思いました。

同時に、母に対して、そこまでは踏み込めていないと認識しました。今後の人生の中で必ず向き合う時が来るし、それが出来ると思っています。

その為に、一番問題に感じているのは、「相手本位」です。この意味が私自身、まだ全く分かっていません。踏み込むことが面倒くさいと心の奥底で思っているから、怖いと思っているから、大企業ではそんなことできないと思っているから、それでは周りから変な奴だと思われるから損をすると思っているからだだと思います。同じ土俵で戦おうとしています。

講義を聞いてから、「相手に安心を与える」という事を意識し始めてはいます。しかし、それは「ミスをしない」であったり、「いつもの返答よりも一歩踏み込むこと」であったり、上部だけのパフォーマンスになっているところもあります。この組織にとって、必要としている安心は何なのか？を理解し、それぞれの同僚の安心は何なのか？父の安心は何なのか？を特定する必要があります。

私は、「この人こういうことに困っているな」と思ったら直ぐにそれを解決しようとしてしまいます。それは自分が好かれないからで、得だと思っており、それを「安心させること」と混同しているからです。

つまり、

「相手の価値観の借りる」のではなく「相手の顔色を窺っている」ということです。

組織の理念や目的、思想学習で教わっている高い価値観がその瞬間、綺麗さっぱり消え

てしまう、しょうもない自分がいます。それは、優しくありません。それは、相手の価値観にとって都合の良い人になろうとしており、思想的「相手本位」ではありません。

衝突を恐れているべきことが言えなくなっていたりする自分がいて、それは安心を与えてのではなく、依存を与え、舐められる根拠を作ることになります。

しかし、一方で公明正大に正しいことを唱えても暴力になります。だから、負ける相手と戦っていないだけなのかも、と都合の良い認識をしたくなる自分もいますが、シンプルに考えると、「自分に嘘をつかないこと」それだけは崩さずにやっていこうと思いました。

会社で都合の良い人間にならないこと、努力に逃げ込まない事、素直になること、これらを切り離さないことは自分のこれからのテーマになってきます。

また、ハイデガーの「存在と時間」でいくと、私の会社は私を含め全ての人が非本来的な生き方をしている恐れがあります。一時期は、心理的安全性の本などを読み漁っていましたが、本来性を持って周りが正直に、率直に仕事をできるような文化・空気を醸成していくことも自分の役割です。

マネージャーとしての立場があるからこそ、自分の一言、振る舞いが与えている影響を自覚して行動を変えていきたいと思います。

引き続きご指導をどうぞよろしくお願いいたします。

実は、この後があるのです。

「統合(高い価値観)」を学ぶための「周辺基礎知識」

(前回、ヴィクトール・フランクルの「夜と霧」の先)

「分断された」あらゆる学問の、最高にして最先端を学ぶ(知る)
そこから、「真の変化」を掴む。そして、「統合する」為に

- ・科学と仏教・キリスト教 (日本仏教学院・仏教ウェブ入門講座) より
 - ・バートランド・ラッセル (この人の心を思う)
 - ・「空と量子」 共通する宇宙の真理
- ・世界は「関係性」でできている カルロ・ロヴェッリ
 - ・時間は存在しない カルロ・ロヴェッリ
- ・目覚めよ 日本! — 新しい地球を創造するために — 越智啓子

科学と仏教・キリスト教

日本仏教学院(仏教ウェブ入門講座)より—
(一部加筆・割愛)

「科学」と「宗教」の対立

科学は、キリスト教国であるヨーロッパで生まれました。

科学が生まれる前に力を持っていたキリスト教の教会から、大きな迫害を受けたのは、有名です。

例えば**17世紀**のイタリアの科学者、ガリレオ・ガリレイは、「**地動説**」を唱えたため、キリスト教の教会から**有罪判決**を受けました。そして、「**それでも地球は回っている**」と言ったと伝えられています。

なぜキリスト教は、地動説を弾圧しなければならないのかというと、キリスト教では、世界の不動の中心は地球だと教えているのに、科学では世界の中心は太陽だと主張したからです。

また**19世紀**に進化論を唱えたダーウィンも、さすがに裁判で有罪にはなりませんでした。が、やはりキリスト教を強く信じる人達から迫害を受けました。

キリスト教では、神がすべての生物を創造し、特に人間は、神である自分の姿に似せて創ったと教えているのに、進化論では、サルから人間が生まれたことになるからです。(注)

20世紀初頭のアメリカの各州で、学校で進化論を教えるはいけないという法律ができました。

20世紀後半には撤廃され、1996年には、ローマ法王が、進化論を認める声明を出していましたが、**21世紀**になってもアメリカ人の半分以上の人が、進化論を認めません。

しかし現在の生物学は進化論を前提として進められています。(楠本は異議あり)

このように、キリスト教の人達が作った科学ですが、相容れないところが多く、キリスト教を信じれば科学は信じられず、科学を信じれば、キリスト教は信じられない、という関係にあります。

では、キリスト教と同じように宗教といわれる仏教も、科学と相容れないのでしょうか？

「科学」と「仏教」の関係

ところが仏教では、地動説も、進化論も何の問題もありません。

例えば宇宙観なら、『**阿弥陀経**』には、地球のようなものが東西南北上下にガンジス河の砂の数ほどあると説かれています。

その地球のようなものが千個集まっている世界を「**小千世界**」^{しょうせんせかい}といいます。

小千世界が千個集まっている世界を「**中千世界**」といいます。

中千世界が千個集まっている世界を「**大千世界**」といいます。

これらをまとめて「**三千大千世界**」といいます。

その三千大千世界が数え切れないほど存在するのが「**十方微塵世界**」です。

現代の天文学では、太陽系のような、恒星とその周りを回る惑星の集まりである恒星系が、最低1千万から最大100兆程度集まって銀河系ができています。

その銀河系が、1000億以上集まって大宇宙ができているとされています。

古代のインドでは、象や亀が平面の世界を支えているという宇宙観でした。

そんな時代に、ブッダは天体望遠鏡なしに現代の天文学に近い宇宙観を説かれているのです。

また、仏教には、動物や人間を創造したような神は出てきません。

ただ「**すべての結果には必ず原因がある**」という因果の道理があるだけです。

ですから進化論もまったく問題ないのです。

「仏教」と「量子論」

それどころか、仏教は、現代物理学の量子論とも親和性を示しています。

素粒子の研究で、日本ではじめてノーベル賞をとった湯川秀樹はこう言います。



湯川秀樹

『近代科学においても最近までは「原子」の不変性が信ぜられていたのであるが、今日のいわゆる素粒子なるものはもはや決して恒常なるものではない。

それどころか、なかには中間子のように短時間で自然に他の種類の素粒子に転化してしまうものさえある。

インドにはしかし物質がその本質において無常なものであるという思想、仏教でいう「諸行無常」という思想もあったのであって、この点では今日の物理学の見解との間にある共通性を見いだすのである。』

(湯川秀樹『目に見えないもの』)

また湯川秀樹は、こうも言っています。

『素粒子の研究に、ギリシャ思想は全く役に立たないが、仏教には多くを教えられた。』

(湯川秀樹)

また、量子論では観測する人が素粒子に大きな影響を与えることから、**量子論の父**といわれるニールス・ボーアはこう言っています。



ニールス・ボーア

『原子物理学論との類似性を認識するためには、われわれはブッダや老子といった思索家がかつて直面した認識上の問題にたち帰り、大いなる存在のドラマのなかで、観客でもあり演技者でもある我々の位置を調和あるものとするように努めねばならない。』

(ニールス・ボーア『Atomic Physics and Human Knowledge』)

仏教では、私たちの心が世界を生み出すからです。

原爆の父といわれるオッペンハイマーはこう言います。



オッペンハイマー

『原子物理学の発見によって示された人間の理解力は、必ずしもこれまで知られていなかったわけではない。

また、べつだん新しいというわけでもない。

我々の文化にも先例があり、仏教やヒンドゥー教では中心的な位置を占めていた。

原子物理学は、いにしえの智慧の正しさを例証し、強調し、純化する。』

(オッペンハイマー『Science And The Common Understanding』)

現代物理学が、ようやく仏教の正しさを実証し始めているのです。

知識人の見解

このようなことから、西洋の知識人たちも、科学と仏教は矛盾しないばかりか調和すると口々に言っています。

例えば、ドイツの哲学者ニーチェはこう言います。



ニーチェ

『仏教は基督教に比べれば、100倍くらい現実的です。

仏教は、歴史的に見て、ただ一つのきちんと論理的にものを考える宗教と言っていいでしょう。』

(ニーチェ『基督教は邪教です』)

イギリスの著名な作家、歴史家であるH・G・ウェルズはこう言います。



H・G ウェルズ

『現在では原典の研究で明らかになったように、釈迦の根本的な教えは、明晰かつシンプル、そして現代の思想に最も密接な調和を示す。

仏教は世界史上知られる最も透徹した知性の偉業であるということに議論の余地はない。』

(H・G・ウェルズ『世界史大系』)

20世紀最大の科学者といわれる**アインシュタイン**は、こう言います。

『仏教は、近代科学と両立可能な唯一の宗教である。』

(アインシュタイン・引用:『仏教と西洋の出会い』)

このように、「**すべての結果には必ず原因がある**」という因果の道理に貫かれている仏教は、科学と同じように、非常に合理的で分かりやすい教えなのです。

その上、科学にはできないのに、仏教にできることが3つあります。

それはどんなことでしょうか？

科学の対象は「物質」のみ

科学で何でも分かるのかというと、そうではなく、対象とする領域があります。

科学が対象とするのは、物質だけで、心は取り扱いません。

なぜ科学では心の問題は扱わないのかというと、科学が急速に進歩し始めた、**17世紀の科学革命**に原因があります。

古代では、精神的なものと物質的なものは混然一体となっていました。

日本でいえば、山にも川にも色々な神がいるようなものです。

ところが、17世紀のガリレオあたりから、数値化できる物体を取り扱おうとし始め、近代哲学の父といわれる**デカルト**は、精神と物質を分けてしまいました。

これを「**物心二元論**」といわれています。

自然や世界を心と切りはなして、科学では、物質や機械的な運動など、誰が見ても同じように数値化できるものだけを取り扱うようにしたのです。

そのほうがはるかに単純で、簡単ですから、特に天文学や物理学などにはその考え方がフィットして、急速に進歩しました。

このように、心を見捨て、対象を物質に特化することによって、科学は強力な力を持ち始め

たのです。

そのおかげで、現代のような便利な生活ができるようになりましたので、心と物質を分けた大きな功績です。

同時に、科学は心を取り扱うことはできず、無理に心のことを言うと、非科学的な感じがしてきます。

例えば、心理学を科学だというと、「**それって科学なの？**」と疑問を起こす人が多くあります。

脳科学では？

現代では、心理学は脳科学に統合されていますが、脳科学の場合も、苦しみや痛みなどの感覚は測定できません。

MR Iによって、その時に脳を流れる血液量を計測するだけです。

科学は定義上、心が対象外なのです。

唯物論を信じている人は、脳の神経や電気信号などの物質が心を生み出していると信じていますが、科学的にはそのようなことは言えません。

実際には逆に、心が脳の物理反応を生みだしていると言う研究者もあります。

例えば強迫性障害治療の世界的権威でカリフォルニア大学医学部教授のジェフリー・M・シュウオーツ博士は『**心が脳を変える**』という著書に、様々な実験データは「**脳は心が生み出す子どもである**」ことを支持していると書いています。

さらにシュウオーツ博士は、量子論や仏教も学び、こう言います。

『私たちは、量子物理学と仏教がどちらも意思と選択に宇宙の働きにおける中心的な役割を与えていることについて話し合った。

ブッダの時を超えた「縁起」の法則によれば、世界の無限のサイクルのなかに意識が生まれ続けるのは意思のためである。

そして仏教哲学では、人の選択は物理的世界の何ものによっても決定されない。

これが真理だ。』

(ジェフリー・M・シュウオーツ『心が脳を変える 脳科学と心の力』)

仏教では？

実際に科学の分野では、この問題に決着をつけることはできませんが、この科学で取り扱えない、心の領域を扱うのが仏教です。

ノーベル賞を受賞した[哲学者]で[数学者]のラッセルは、こう言います。



ラッセル

『仏教は、思索と科学の組み合わせだった哲学である。それは、科学的な方法を提唱し、合理的といえる最終的なものを追求する。(中略)

仏教は、計測機器の限界から、科学が取り扱えない領域へ連れて行ってくれる。それは心の領域である。』
(ラッセル『宗教と科学』)

『人工知能の父』といわれるマサチューセッツ工科大学のマービン・ミンスキー教授は、人間の心の研究には、仏教を勉強するのが格段にいいと言っています。

『人工知能をやろうとすれば、当然ながら人間の知能（インテリジェンス）それから心（マインド）の仕組み、働き方が標的（ターゲット）になり、とくに心の研究には仏典が比類なきテキストになる。』

(マービン・ミンスキー教授・出典：田原総一郎『生命戦争 脳・老化・バイオ文明』)

このように、仏教は、科学には取り扱うことのできない、心の領域を詳しく明らかにし、私たちが本当の幸せになる道を解明しているのです。

科学は「目的」を示せない

科学にできないことの2番目は、「方向性」や「目的」は示せないということです。

科学によって、自然法則がどうなっているかを知ることかできますが、それを私たちがどう使うべきかは分からないのです。

例えば、アインシュタインの相対性理論により、

「**E**（エネルギー）=**m**（質量）×**c**（光速）の2乗」

ということは分かりました。

Cは光速のことで、その2乗はものすごく大きな量なので、ほんの少しの質量から、ものすごいエネルギーを生み出せるということです。

しかし、そのものすごいエネルギーを使って何をすればいいのかは、科学は教えてくれません。原子爆弾も作れますし、原子力発電所も作れます。しかし何を作ればいいのかは、科学的にはわからないのです。

言葉を変えれば、科学は強力な手段ではありますが、目的は分からないということです。だからアインシュタインは、このように言っています。

『手段は完全になったというのに、肝心の目的がよくわからなくなったというのが、この時代の特徴と言えるでしょう。』

(『アインシュタイン150の言葉』)

また、ノーベル生理学医学賞を受賞したフランスの生物学者、アレクシス・カレルも、こう言っています。



アレクシス・カレル

『科学者という人間は自分の行く先を知らないのである。総じて発見というものは、少しもその結果を考えずになされたものである。近代文化は失敗したのである。それは我々に適合しない。それは人間を知らずに作られた。』

(アレクシス・カレル／出典：水原舜爾『科学から仏教へ』)

では、目的についてはどうすればいいのかというと、アインシュタインはこう言います。

『宗教なき科学は欠陥であり、科学なき宗教は盲目である。』

(アインシュタイン『アインシュタイン、神を語る』)

「強力な手段」である科学に「目的」を与えるのが宗教の役割だ、ということです。つまり両者は常に隣合わせであり、仏教は科学であったと、このアインシュタインの言葉は、そのように語っているようです。

ドイツのノーベル賞物理学者で、量子論の創始者の一人であるマックス・プランクは、こう言います。



マックス・プランク

『自然科学と宗教とは、「人間から独立した、大宇宙を支配する最高の力」が存在するということを認める点で完全に一致している。人間は自然を認識するために科学を必要とし、行動するために宗教を必要とする。科学と宗教とは互いに補足し合うものであって、両者の間には全く矛盾は見当たらない。』

(マックス・プランク／出典：水原舜爾『科学から仏教へ』)

このように、科学には目的を示すことはできませんが、まさにそれを明らかにされたのが仏教です。

科学では、生きる意味は 分からない

さらに、科学にできないことは、私たちの生きる意味を教えることです。

生きる意味というのは、

私たちは必ず死ななければならないのに、なぜ生きるのか、ということです。

普通は、せっかく頑張ったものが壊れてしまうと、「今までの努力は何だったのだろう」と悲しくなったり虚しくなったりします。

例えば大学で、3ヶ月間かけて書いていた卒業論文なのに、完成直前に消えてしまったら、これまでの努力は何だったんだ、と放心状態になります。

また、長年働いてやっと建てたマイホームが、1カ月後に火事で焼けてしまうと、今まで働いてきたのは何だったんだ、と茫然自失になります。

また、苦労して産み育てた子供が死んでしまうと、あまりの悲しさに言葉ありません。

ところが、

人生の最後に死んで行くときは、卒業論文やマイホームや子供だけでなく、今までやってきたすべてが失われます。

最後死んでいかなければならないことは、すでに分かっているのですが、それなのに何の意味があって、頑張って生きなければならないのでしょうか？

このどんな人にとっても大切な、生きる意味については、科学ではまったく分かりません。

それについて天才科学者といわれるアインシュタインは、『私の世界観 (THE WORLD AS I SEE IT)』で、このように言っています。

『生きる意味は何か？それに答えるのが宗教です。』

(アインシュタイン 『THE WORLD AS I SEE IT』)

では、宗教といっても色々ありますが、どんな宗教でしょうか。

アインシュタインの『宗教の3段階』

アインシュタインは『私の世界観』で、宗教を3段階に分類しています。

第一ステージが、「**怖れの宗教**」です。

原始人が、星や火、地震、病気など、不可解で、自分よりも力のある天地自然を神として現世利益をお願いするものです。

第二ステージが、「**倫理的宗教**」です。

擬人化された裁きの神の概念がでてきます。

信仰と政治を混同して、異端者や異民族の抹殺を求めます。

第三ステージが、「**宇宙的宗教**」です。

これは宇宙と星々の広大無辺さの理解を深めた宗教で、神は出てきません。宇宙の法則によってすべての国を統合するものです。

そしてアインシュタインは、こう言っています。

『宇宙的宗教の要素がはるかに強くなっているのは仏教である。』

(アインシュタイン 『THE WORLD AS I SEE IT』)

また、アインシュタインは、こうも言っています。

『現代科学に欠けているものを埋め合わせてくれる宗教があるとすれば、それは仏教**です。』**

(アインシュタイン)

当時、アインシュタインの暮らしていた欧米では、本当の仏教を知ることはできなかったと思いますが、アインシュタインの推測通り、科学のような合理的な教えによって、科学では教えることのできない、本当の生きる意味を明らかにしたのが**仏教**なのです。

以上

バートランド・ラッセル Bertrand Russell 1872-1970



ウェールズ生まれの英国貴族。イギリスの首相を2度務めたジョン・ラッセルは祖父にあたる。ラッセルは本名をバートランド・ラッセルといい、名門貴族出身の「数学者」、「哲学者」です。ケンブリッジ大学で、数学と哲学を融合した数理哲学に熱中した彼は、若いころに「数学原理」という本を出版し、一躍有名となった。

ケンブリッジ大学卒業後に同大学で教鞭をとるが、平和運動に傾倒しすぎてクビになる。社会主義運動にシンパシーを感じていたが、共産主義には批判的であった。1950年に「人道的理想や思想の自由を尊重する、彼の多様で顕著な著作群を表彰して」ノーベル文学賞を受賞する。1955年にはラッセル＝アインシュタイン宣言で核兵器廃絶を訴えた。

これだけ見ると、非常に華々しい経歴の持ち主のように見えるが、彼の人生は壮絶なものであった。

2歳の頃に母親を、4歳の頃に父親を失い、育ての親であった祖父母には厳格に育てられた。

祖父母はピューリタンの教育（厳しい教育を施すキリスト教プロテスタントの一派）をラッセルに施し、幼いころから厳しく質素な生活を送っていた。

これが原因で、思春期のラッセルは自殺願望さえあったとされている。

さらに、大人になったラッセルは第一次世界大戦に直面。

人類の幸福を願う彼は、**全く合理的でない戦争の勃発に反対し、反戦活動を行う。**

人々の為に立ち上がった彼だったが、結果的に投獄・逮捕され、危険な目に何度も遭遇。

そんな壮絶な人生を歩んできたラッセルが58歳（1930年）の頃に出版した本が「幸福論」である。

- ・人生の生は、本質的に幸福なものである。何故、そう感じるのか？ 自我の牢獄に囚われていないから

ラッセルの告白

— 仏教とキリスト教について

なぜ、私はキリスト教ではないのか —

YouTube チャンネル「偉人のことば」

筆耕及びまとめ：Kアライアンス 大久保敦史

私は心から、
ブッダが歴史上最も偉大な人物であると思うが、
心の中では、彼をキリストより上に置くことができない。

—バートランド・ラッセル—

「幸福論」で有名なバートランド・ラッセルは 20 世紀を代表する偉大な思想家です。彼の著書『わたしはなぜキリスト教徒ではないか』は、ラッセルが西洋の伝統的な宗教協議に対して、疑念をいだいていたことを表しています。

ラッセルは仏教の倫理的な枠組みや苦しみと執着に対する考え方を称賛し、ブッダが歴史上最も偉大な人物と認めていましたが、しかしそれでも感情的にはキリストを優先するという複雑な心境を抱いていました。当然ですが、キリストとブッダを比較することは海と山を比較するようなものです。ブッダは決して自分が神であるとは主張していません。

今回はラッセルの哲学と宗教に対する見解を掘り下げ、東洋哲学が西洋の思想にどのように影響を与えたのかを解説していきます。それでは始めていきます。

■ 神にも原因が必要である

ラッセルの哲学的探究の旅は思春期に始まります。若い頃の彼はギリシャ文字と音声学に基づくコードを使って、秘密の日記に自分の考えを記していました。この独自の手法は彼が自らの考えが他者から誤解されたり、嘲笑されたりすることへの恐れから生じた自己防衛の考えを象徴しています。

若き日のラッセルの思想に大きな影響を与えたのは、ジョン・スチュアート・ミルの「功利主義」の思想です。功利主義とは倫理学の一派であり、「最大多数の最大幸福」を

追求することを中心に据えた思想です。具体的には、人間の行動や社会の政策がどれだけ多くの人々に幸福をもたらすかを基準にその存在価値を判断するという考え方です。さらにミルが提唱した功利主義の革新的な部分は、快樂の質にまで踏み込んだ点にあります。ミルは述べました。

**「満足した愚か者であるよりも、
不満足なソクラテスである方が良い」**

これは簡単にいうと、「高尚な快樂は、低俗な快樂よりも価値がある」という、快樂にも質やレベルがあるということを指しています。そしてこの功利主義の考えは、宗教的な教義や実践が社会全体の幸福にどのように貢献するのかを問うことになりました。キリスト教の教義や倫理観は必ずしも「最大多数の最大幸福」を基準としていません。例えばキリスト教では、個々の魂の救済が重要視され、神への信仰や個人の道徳的な義務が強調されています。

最終的にこの功利主義は、アリストテレスが唱えた第一原因論への批判に繋がります。第一原因論とは、あらゆる存在や出来事には何らかの原因があり、それらの原因を遡っていくと、最初の原因(第一原因)があるという考え方です。この論理は、すべてのものは原因と結果の連鎖で繋がっていて、連鎖の始まりには必ず最初の原因が必要であり、その原因こそが神であると主張するものです。そしてラッセルは次の仮説に辿り着きます。

「もしすべてのものに原因が必要だとするならば、神にも原因が必要である」

ミルの影響によりラッセルは従来の宗教的信念、特に自由意志や不死の教義に疑問を持つようになります。そしてラッセルは日記にこう記しています。

「いったい、誰が神を作ったのか」

■ 神の存在証明

ラッセルがケンブリッジに入学した当初、彼はまだ宗教的信念や倫理的価値観に関して、確固たる結論を持っていませんでした。ケンブリッジでラッセルが最初に直面した大きな思想研究はヘーゲル主義との出会いでした。当時のイギリス哲学界ではヘーゲル主義が一つの中心にあり、形而上学的構造に焦点を当てていました。

ヘーゲル哲学はすべての現象が論理的に関連し合い、一つの全体に統合されるという「絶対精神」の理論を提唱しています。この理論は宇宙全体が一つの有機的なシステムとして機能し、個々の存在はその全体の一部に過ぎないという考え方です。当時の哲学界は、このヘーゲル主義の枠組みを用いて、個人の魂が永遠に存在し続けるという「時間の非現実性」という、不死や神の存在を論証しようと試みていました。

ラッセルは当初この影響を受けて、個人的な不死や神の存在について真剣に考えるようになります。しかし、彼は次第にこの構造があまりにも抽象的であり、現実の経験や感覚から遠く離れていると感じ始めたのです。

ラッセルの思想的な転機が訪れたのは、ヘーゲル主義に対抗する経験主義と分析哲学の新しい潮流です。これは常識や日常言語に基づいた分析哲学を重視し、現実世界の経験に根ざしたもので、抽象的な形而上学を批判しました。そしてラッセルはヘーゲル主義の抽象的な理論から離れ、哲学とは日常生活の問題を解決するためにこそ使われるべきだと主張しました。

神の存在や不死といった伝統的な信念に対する疑念は、神の存在証明に関する議論に集中することになります。神の存在に関する議論をしていく中で、その多くが論理的に矛盾していることに気づきました。これによりラッセルは宗教的信念を次第に放棄し、より懐疑的で批判的な姿勢を取るようになります。そして彼は次のように述べました。

「神の存在を証明するための伝統的な議論を、
詳しく検討すればするほど
それらが不十分であることが
ますます明らかになった。」

■ 仏教思想との共鳴

ラッセルのエッセイ『なぜ私はキリスト教徒ではないのか』において、彼はキリスト教の教義に対する批判を展開します。彼は、キリスト教の教えが罪や罰に過度に焦点を当てており、自由な思考や個々の幸福を制限していると考えました。特に性に関する禁欲的な教えや地獄の教義などが、人々に不必要な恐怖や罪悪感を与え、それが真の幸福を妨げていると指摘しています。

一方で、仏教の倫理観に対しては個人的な悟りや苦しみの軽減を強調する姿勢が、ラッセルの功利主義的な衝動と深く共鳴していると考えました。功利主義は人間の幸福を

促進し、苦痛を最小限に抑える行動を支持するものです。

ラッセルは仏教が神の存在を前提としない点を評価しています。彼は仏教が超自然的な存在に頼らず、理性と観察に基づく教えを重視していることに注目しました。ラッセルが仏教において特に評価したのは『中道』の原則でした。これは仏教の中心的な教えの一つであり、極端な行為や思想を避け、バランスを重視する道です。彼はこの考えを実践的な倫理哲学として高く評価しました。彼の様々な著作においても、理性と節度を持って導かれる生活が個人の平和と社会的健康に不可欠であると主張しており、これは仏教の教えと深く一致しています。

ラッセルにとって、キリスト教の教義はブラックホールのようなものでした。信じて入っていくと全てのものが吸い込まれ、どんどん自分が小さくなり、自由に動くことができなくなります。特に「罪」や「罰」は重力のように強烈に働き、逃れることはできません。彼は「これでは自由な思考や幸福なんて、宇宙の果てに吹き飛ばされてしまう」と感じます。

一方で、仏教は宇宙を旅するようなものです。そこには無数の星や惑星があり、自由に探索することができます。宇宙の広さを認識した時、私たちには自由に考えて行動することができるのです。ラッセルは、仏教が心と時間をどのように概念化しているかに関心がありました。なぜなら、仏教が現代の科学と哲学に驚くほど共通点があると感じたからです。彼は著書の中で、

「心とは永久的な本質を持たない、
経験の集まりである」

と、頻繁に述べており、この考え方は仏教の無我の概念と深く共鳴しています。ラッセルは、仏教の教えである「すべての物事は常に変化している」という無常の考えをよく引用していました。彼はこの無常を理解することが人間の苦しみを和らげるための重要な鍵だと強調していたのです。そして彼は心について以下のように述べています。

「私たちが心と呼ぶものは、
さまざまな知覚の集合にすぎず
それらがある種の関係によって結びつけられ
完全な単純性と同一性を持っていると、
誤って仮定されている」

この視点は、自己とは感覚的経験や絶えず変化する思考を持つ単なる集合体に過ぎない、という仏教の教えを反映しています。そして、何よりラッセルが仏教から最も深く影響を受けたのは、無神論である、ということです。仏教には全能の創造主である神が存在せず、神の介入に頼ることなく、倫理的な生活や心理的な洞察を追求する点がラッセルの世俗的な見解に非常に合致していました。

晩年のラッセルは仏教を頻繁に称賛しており、その精神的な道が神の存在に頼ることを必要とせず、合理的で思いやりのあるアプローチに理想を感じたのです。さらにラッセルは、仏教が本質的に非暴力的であることを高く評価していました。これは、他の主要な宗教が歴史的に暴力と強制の時代を経験してきたのとは対照的であったからです。仏教の武力による協議の強制を避ける姿勢は、ラッセルにとって合理的に称賛される宗教実践のモデルとなりました。

■ 罪と罪悪感

1940年代、多くの精神分析家が罪悪感を「生まれつき持っている感情」として解釈する中で、ラッセルはこれを否定し、若者の罪悪感の起源は「親や権威者からの罰の恐れ」から生じると考えました。罪悪感は権威を尊重することで初めて存在しうる感情であり、その背後には、社会が作り出した枠組みが存在しているのです。

ラッセルはまた、神を信じない人々でさえ罪の感覚を抱くことを指摘しました。これは、人間が内面的に持つ「罪」の概念が宗教的教義に依存しないからです。古代ユダヤ教では集団的な罰から個別的な罰へと発展し、アダムとイヴの原罪に至るまで「罪」は人類の普遍的なテーマとして語られました。アダムの過ちによって、私たちは皆生まれながらにして罰を受ける存在となったというこの教義は、実は今でも社会のシステムにおいて、同じような理屈が意外にも受け入れられていることがあります。ラッセルは、良心の声に逆らう行為こそが「罪」であると考えました。罪は神に関連付けられるものではなく、自己の内面に宿る道徳的責任から発生するものです。仏教の教えでは、罪は実体を持たず心が作り上げた幻想に過ぎません。

「私は道徳的な基準を向上させるために
役立った宗教が
一つとして存在すると考えていません。」

ラッセルは、道徳的行動には神や来世への信仰が必要でないと主張しましたが、彼は単に宗教を拒絶したのではなく、理性と論理を武器にして、新たな視座から世界を見つめ直そうとしたのです。道徳的行動とは神の命令に従うことではなく、自分の行動の結

果を合理的に理解することで、誰もが未来への道を切り拓く力を手に入れることができるのです。

■ 理性を超えた感情

バートランド・ラッセルという人物は、常に「知性」と「感情」の狭間で揺れ動きながらも、誠実に真理を追究し続けた偉大な思想家でした。彼は生涯を通じて「論理」と「理性」を重んじ、神学や宗教的な迷信に対して鋭い批判を繰り返してきました。

しかし、その知性的な態度とは裏腹に、彼の内なる感情はイエス・キリストという存在に対して特別な親しみを抱いていました。彼の言葉、

「理性では釈迦が人類史上最も
偉大な人物であることは間違いないが、
私はどのキリスト教の一員でもないし、
キリスト教の神話や神学から
完全に距離を置いている、
にもかかわらず、
どこかで釈迦をキリストよりも上に置くことができない。
理性では理解している。
しかし、感情の面ではキリストが上だと感じる。」

この告白は、信仰や宗教がいかに深く個人の心に刻み込まれ、知識や理性を超えて感情に影響を与えるかを物語っています。

ラッセルは生涯を通じて自己の疑問を問い続けました。知性と感情の狭間で揺れ動くことに対して決して恐れることなく、それを自分の一部として受け入れたのです。若い頃、嘲笑されることを恐れ、隠れてギリシャ文字と音声学のコードを使い、秘密の日記を書いていた彼は成長し、たとえ克服ができないことがあったとしても、その矛盾を受け入れ、どちらか一方に偏ることなく、両方を見つめ続けた偉大な哲学者となりました。

「世界の本当の問題は、
愚か者や、狂信者が、正しさに絶対の確信を持ち、
賢者たちは、疑念に満ちていることだ。」

ラッセルが仏教から学び導き出した結論は、「我々は、理性を持って生きるべきであ

る」ということです。しかし、その理性とは単なる冷徹な論理の積み上げではなく、中道に基づいたバランスの取れた道でなければなりません。

常に変化する人生の無常を受け入れ、執着を捨て(執着に囚われず)、自由で柔軟な精神を持つことが、真の幸福への道なのです。

そして今回の最後のラッセルの言葉です。

「知識を愛する人は、
世界を理解しようと、努める。」

以上がラッセルと仏教の繋がりについてです。

ラッセルに解説してみても確認したかった。

この言葉について…

高次元経営より

※知識を愛する人は——知識をひたすら求める人は、学びを続ける人は、
世界を理解しようと——世界を知ろうとしている。

世界とは、自己と環境との関係性という事で宜しいですか？

相手を知ろうとしている

人を、国を、民族を、

それは同時に、今、目の前の現実、

つまり、世界を、

そしてそれは、自然・宇宙を…ですよね？

何故、知ろうとするのか？

それは、

自己(全体)を知りたいから・・・ですよね。

楠本浩之

そして、

もし、そうなら…

さらに、ラッセルに伝えたかった事…それは…

アインシュタインにも、共に伝えたかった

【仏教と量子力学】「空」とは「量子論」のことだった！？

「空と量子」共通する宇宙の真理

YouTube OKYO チャンネル より

筆耕・まとめ Kアライアンス・メンバー 河村ちさと

「ホーキングの再来」と評される天才物理学者 カルロ・ロヴェッリの著書（世界は「関係」でできている）から仏教と量子力学はこんな共通点を持っているという内容をご紹介します。

古代仏教の教えには、現代物理学の理論にとってもよく似た内容が見受けられます。
今から 2500 年前、お釈迦様が説いた悟りの言葉はこの世の真理が説かれています。
それらは現代の科学は解明しようとしている世界の本質と同じものではないでしょうか？実は仏教は面白いほどに科学的な理論を展開しています。

また、科学はこの世の本質を追求しようとする哲学的な側面を持っています。
この一見両立しそうな二つの学問が 2500 年の時を超えて、これほどまでに共鳴しあうのかということが分かります。

古代の仏教と最新の科学は、その入口が違っても同じ見解でこの世の真理に迫っています。言い換えれば、最新の科学で明らかになってきたこの世界の真理は、すでに 2500 年前の仏教で説かれていたということになります。

仏教は宗教だと思っている方は多いと思います。もちろん宗教に違いありませんが、お釈迦様は、仏教の教えを広める時に、多くの人にこの世の真理を伝えようと寿命が尽きるその日まで、説法を説いて歩く日々を送りました。

もしその内容が量子力学とそっくりだったとしたら？
釈迦の説法とは、もしかしたら科学の話だったのかもしれない。それならば、お釈迦さまは、古代の物理学者だったとも言えます。

なぜなら、

カルロ・ロヴェッリは、仏教思想について「現代の量子力学と表現は違ってもその内容は我々が考察するための武器になり得る」とまで語っているのです。

■量子力学とは？

量子力学とは、「この世のしくみ」、「この世界の真理」を解き明かすために、その基盤となる始発点を探し求める自然科学です。

今から約 100 年ほど前に科学は、原子よりも小さな物質である粒「量子」を発見しました。その量子のふるまいが、人間の智を超えた奇妙なふるまいをするので、物理学者たちは大いに困惑しました。

量子とは何でしょうか？19 世紀の終わりごろ、マックス・プランクが発表した「熱放射現象」に関する論文の中で、初めて量子という言葉が用いられたのが、最初と言われていす。彼の仮説は、既存の概念であるエネルギー性質とは矛盾するものでした。

量子とは、原子レベル以下の小さな物質やエネルギーの単位です。物質を原子レベルまで分割すると量子の世界となり、それらは、電子や陽子、中性子、光子、ニュートリノ、クォーク、ミュオンなどの素粒子などがあります。量子は、粒子と波の 2 つの性質を併せ持ち、通常の動きは波の性質を持つ状態で、人間が観測すると「粒」の動きに変化をするという、それまでの常識では考えられない振る舞いをしました。

得体の知れない量子のその振る舞いは、研究者たちを困惑させましたが、その後、科学は、光と物質の関係を紐解くには「量子」という不思議な概念を理論に取り入れざるを得なかったのです。量子とは何かを解明する以前に、この不思議な物質がないとうまく現象と理論の整合性が取れなかったのです。当初、量子は科学者を惑わせ疑われつつも継続して検証が続けられました。そして今では、多くの研究者が量子についてその性質は、謎のままでも存在自体は確信しているところまで来ています。

アインシュタインはプランクの考えを発展させ、1905 年に発表した論文「光電効果」を説明する理論で 1922 年ノーベル賞を受賞しました。そして今もなお 2022 年のノーベル賞が量子性に関する研究であったように現代科学は、量子とは何かその本質とはどのようなものを探求し続けています。

■この世のしくみ ～ 世界は「関係」でできている ～

この世界のすべての物質現象は、その構成要素の個々の物質が独自の性質を持つ実体として存在しているのではないといいます。各要素がお互い相互関係を基に相対的に区別しているだけなのです。どういうことかというと、たとえば母親という生き物は、孤立して存在しているわけではありません。母親という性質の存在が、いきなり何もないところから発生す

るわけではなく、女性という存在が子を授かることにより、母親という性質の存在がその相互関係によって派生するわけです。女性に男性がいるから女という存在となり、惑星は恒星があつてこそ、惑星といわれ、すべての事象は他の別のものとの相対的な関係によって、定まるわけです。

物理学の世界は、「事象」の要素となる根本の実体を明らかにすることを求められ、物質の最小単位にまでその研究は進められてきました。しかし世界は量子の発見によってさらに問題が起きました。量子があまりにも不可思議なふるまいをするので、科学者たちはその追求に困惑する立場に追い込まれました。

「この世界」のよりどころとなる実体とは何なのか？

この世を構成している仕組みの基礎の要素とは？西洋哲学や物理学では未だ解決できないこの問題に対し、ある東洋思想がヒントを与えることとなったのです。

それは仏教の「空」の考え方でした。

「空」思想が語るこの世界とは、この世の事象はすべて、他者との関係「縁」によって成り立っている現象であつて、各構成要素が仮に和合している現象に過ぎず、それらの現象は、自立的な実体はないと断言します。「量子」は他者からの干渉によってその本質が変化するということなので、その確固たる実体的な本質は無いということになり、仏教と量子力学の見解はとても良く似ています。

ロヴェッリは知人のすすめで、ナーガールジュナの文献と出会い、そしてこのような見解にたどり着きます。

「ナーガールジュナは、究極の基礎を求めるといふ西洋で陥りがちな罠に落ちるのを防いでくれる」

「ナーガールジュナの思想は、他のものとは無関係にそれ自体で存在するものではない、という主張だ。この主張はすぐに量子力学と響き合う」

「ナーガールジュナは現代科学が再考するための独創的な方法を提供しており、ナーガールジュナの助けがあれば、量子の世界のことも少しだけ考えやすくなるはずだ」

ロヴェッリのこの言葉は、古代インドの哲学が現代の量子力学の研究に有益だと言い、モヤが晴れるヒントになると言っています。

「ナーガールジュナは、独立した存在があり得ないということを『空』という専門用語で表

している」それは「事物は他のもののおかげで、他のものの働きとして、他のものとの関係で、他の物の視点から存在するのだ」 —カルロ・ロヴェッリー

リンゴは、人間において、人間に採取される立場で、人間の食物としての関係で、人間の視点で存在するわけです。人間との関係がなければ、リンゴは単に赤い球体にすぎず、それがフルーツであるという定義さえ失われるのです。すべてが依存において存在し、それらの実体はない『空』だとしたら、この『私』という存在は何なのでしょう？私自身は存在しているといえるのでしょうか。仏教ではやはり「私」というものは、存在しないと言います。私も他との縁によって仮合している現象に過ぎず、その実質たる実体はないと言うのです。

では赤いリンゴを食べている私は何者なのでしょう。これについてロヴェッリーはこう見解します。これは自分という定義の相互作用の集まりの一構成要素に過ぎない。「私」とは、互いに連絡し合う「膨大な現象」が構成する総体でしかなく、それらは互いに依存し合っている。

この言葉を仏教的に解説すると「五蘊」の集まりが煩惱やエゴの影響を受けて、架空の自我を見出しているに過ぎないのです。そして近代の物理学者たちが頭を抱えている問題とは物理学は長い時間をかけて、「物質」から「原子」、「場」、「素粒子」というように究極の実体を追い求めてきましたが、ここで「量子場の理論」と「一般相対性理論」の関係にぎくしゃくして暗礁に乗り上げてしまったようです。つまり最新量子学の理論と偉大なる大発見である相対性理論の辻褄が合わなくなってしまったのです。

ナーガールジュナは、物質の究極を求めてそこに意味を持たせようとする事になんと言葉をかけるでしょうか。結局は何の実体も存在しないという一言で終わってしまうでしょう。この世の事象はすべて何も実体は存在しないということをあえて可視化して証明することが、自然科学の最終到達地点なのかもしれません。

■人間の干渉なくして本質はない

私たちのこの世界、現実と呼んでいる現象は、互いに作用しあう構成要素の関係し合ったネットワークでできています。事象の存在は相互作用を通してのみ認められ、相互作用に関与しない事象は存在しないということになります。この見解は量子学にとって過激な結論に導かれます。相互作用なくして存在なし、ということは電子がまったく相互作用「関与・干渉」していないとき、その電子の実体がどのようなものであるのかを問うことは、全く無意味だという結論になるからです。

では観測していない時の電子は何者なのだろうか？という疑問だけが残ります。

1930 年ごろのアインシュタインは「物理理論は世界を客観的に記述し予測するものだ」と、事象の客観性を主張し神はサイコロは振らないと述べ、そのころの主観的な立場を取っていた量子論と理論対立していました。アインシュタインは物質は私たちが観測する・しないにかかわらず、それ固有の本質を持っていて、確率的な観測に縛られることなく歴然とそれらを数学的に予測できるものだと主張していました。そこであの有名な「アインシュタイン」と、インドの「思想家タゴール」の対話の例があります。

タゴール：

この世界は人間の世界です。世界についての科学理論も所詮は科学者の見方にすぎません。

アイシュタイン：

しかし、真理は人間と無関係に存在するものではないでしょうか？例えば私がみていなくても月は確かにあるのです。

タゴール：

それは、その通りです。しかし月はあなたの意識になくても他人の意識にはあるのです。人間の意識の中にしか月は存在しない事には変わりません

アイシュタイン：

私は人間の意識を超えた客観性が実在すると信じています。ピタゴラスの定理は人間の存在とは関係なく存在する真実です。

タゴール：

しかし科学は月も無数の原子が描く現象であることを証明したではありませんか。あの天体に光と闇の神秘をみるのか、それとも無数の原子をみるのか。もし人間の意識が月だと感じなくなれば、それは月ではなくなるのです。

この対話の決着はその後 100 年ほどたった 2019 年ノーベル物理学賞受賞者「ウィグナー」による「ウィグナーの友人」という思考実験によって「客観的な実在」を否定するような実験結果が発表されました。

ウィグナーの友人のパラドックスは今でも物理学者と哲学者を魅了し続けています。

ユージン・ウィグナーが考案したこの思考実験は二人の観察者が異なる事実を経験する物理的状況を表しています。量子物理学では、「事実」の客観性は絶対的ではなく、「観察者」に対して「相対的」であるだけだと解釈できます。

ウィグナーは人間がどう認識するかの意識こそが世界を決定すると述べています。

これはアインシュタインが主張した「客観的な实在論」は否定され、現実は観測者に依存するため、様々なパターンが存在するということになります。

このように「関係」による世界観では、この現実世界には自己に依存した主観的な世界しかないということになります。この結果は、世界は主観に応じて複数の異なる世界が生じていると証明しており、この論証もまた仏教の「一水四見(いっすいしけん)」という思想と同じ意味の解釈であると言えます。

※一水四見…認識の主体が変れば認識の対象も変化する同じ水でも見る者の立場や心の状態によって全く異なるものに見えているという意味

これについてアメリカの宇宙論学者アンソニー・アギーレは、この現象を次のように解釈しました。

電子とは、私たちが測定や観察を行っているときに出現する特殊なタイプの規則性であり、それは実体と言うよりもむしろ秩序なのだ。

その秩序を決定するのが私たち観測者だとするならばその世界は私たちによって作られたものとして存在するのだ。

では私たちは一体何なのだろう？

仏陀はそれを「空」と呼ぶのであろう —カルロ・ロヴェッリー—

空なるかりそめの世界を確固たる物質と見えてしまうのは、肉眼で巨視的に見ているからです。よく見るとそれらの粒はスッカスカでポツポツとばらけた出来事が相互作用の中にあるだけです。

これを受けこの理論に対立していたシュレディンガーは負けを認めた上でこのように言いました。

「粒子を永続的な実体と考えるのではなく、それらは永続的であるかのような幻想を与えるだけでつかのまの出来事と考えた方がよい」

— エルヴィン・シュレディンガー —

このシュレディンガーの言葉は仏教の解釈と全く同じで仏教でもこの世の現象は刹那刹

那の変化の中の現象があたかも一連のつながりのように見えているだけで、それらは一瞬のかりそめの姿の連続に過ぎないとし、外界に存在すると認識されているものは、主観的な認識が生み出した表象に過ぎないと仏教は伝えています。

科学者たちはこの世の真理を突き止めようとする研究の中で、悟りの道へと進んでいつているのかもしれませんが。

■相手の本質を知る

事象とは事物がお互いひたすら影響を及ぼし合っている所以他们の実体を知りたいければ、それ自体の対象物を追求するのではなくそれに伴う相互作用に注目する必要があります。

相手の本質を知るには、その人の相互関係を調べることによって相手の本当の本質が見えてくるということです。

私たちは気になる人がいたら周りが見えなくなつてその人の好いところばかりに目が行きがちですが、対象物自体には本質は存在せずそれらは関係によってできあがつた「かりそめの物体」です。

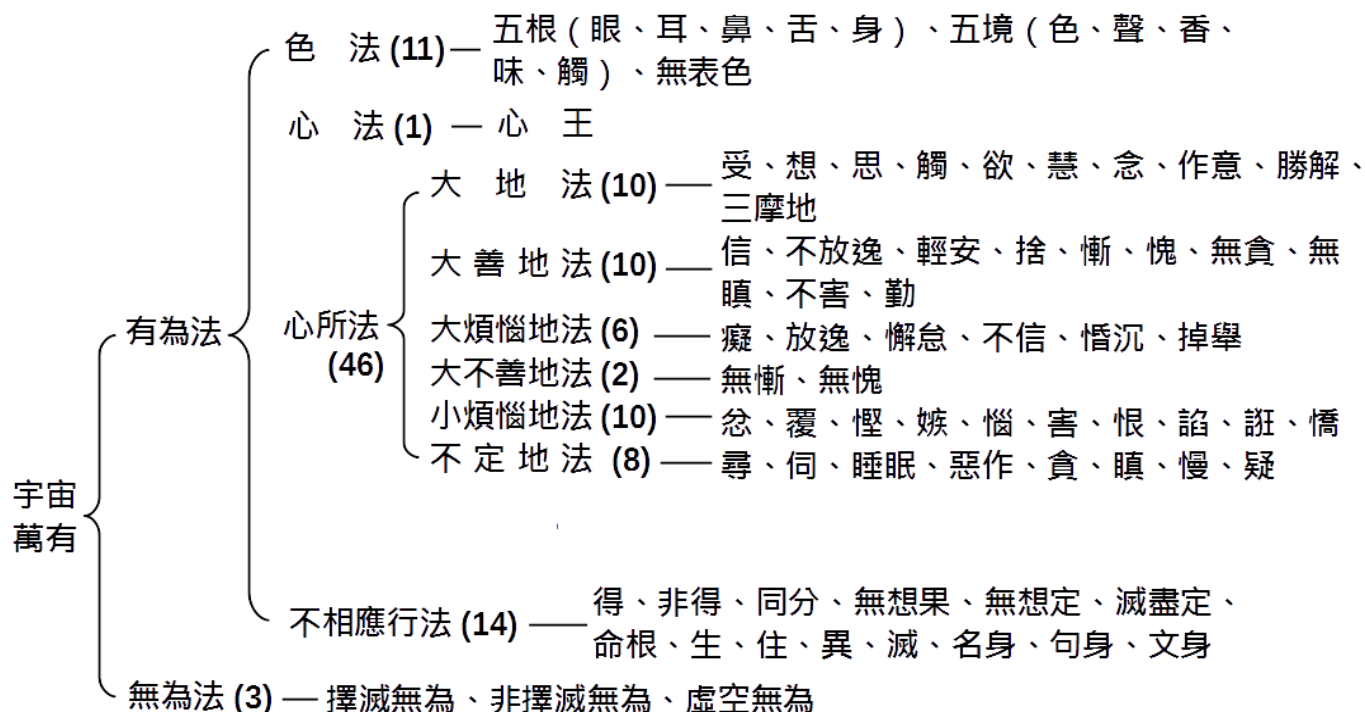
かりそめの本性を知るには、周りの環境や交友関係、持ち物や嗜好品、趣味といったその人を取りまく関係を研究すれば良いわけです。

■仏教の量子学があった！

仏教思想の歴史のなかでもかりそめの現象の「空思想」とは別にこの世界の仕組みを細かく細分化して解明しようとする科学的な研究機関がありました。今でいう量子力学と酷似している研究でこの世の事象について物質の最小単位まで分類しそれらの本質を解明しようとするものです。

五位七十五法と言われるその分類法は、説一切有部という仏教部派団体の思想です。一切の事象を実体としてとらえ、それらを5つのカテゴリに大別し、さらにそれを75個に細かく分類して人間の精神や物質などすべての現象の最小単位まで示しました。

五位七十五法



「五位七十五法」は仏教の実践と修行の必要性から現れたもので、特に心の働きや精神的な要素を詳細に分類したものです。心の仕組みを微細なる形まで追求める理由は心が世界を創り出しているという仏教の教えから心のはたらきを解明することで、世界の構成が把握できると考えたからです。

この「五位七十五法」の解釈をナーガールジュナは「空思想」で対立しました。ナーガールジュナはこの世界はすべて実体をもつ物質はないという理論で、実体に迫ろうとする説一切有部の解釈を批判しました。

まさに今、量子力学が物質の究極に迫ろうとしていてそこへ量子の奇妙なふるまいが人々を緊迫させているということがすでに 2000 年前に繰り返されていたということです。

■不確定性原理と仏教の「不可知」

不確定性原理とは素粒子は位置と運動量の両方を同時に正確に計測できないことを示し

ます。これは古典力学とは異なる量子力学の本質的な特徴を反映しています。古典力学では、物体の位置と運動量を任意の精度で同時に知ることができるとされていますが、量子力学ではこの同時測定の限界が存在します。

これは量子力学が確立的な性質を持つ理論であることから粒子の性質を確定的に知ることが不可能であることを示しています。この点に関して仏教では言葉では解説しきれない宇宙の偉大なる真理を不可知であると説明します。

不可知とは人間枠の思考では計り知れない未知なる領域のことで人間がその超越した世界を認識することは不可能だという説です。決してその世界が解明できないと言っているのではなくすでにその世界が存在しているのは確かなのですが、その真理は言葉で解説することは不可能であり、それらは言葉で理解するのではなく自身の修行において体得して自身で感じるしかないものなのだという事です。

人間の計算では計り知れないこの世の不確定性さを両者は同じような見解で語っていることがとても興味深いです。両者は言語を超越した世界を表していて言語は人間枠でしかない狭い世界観である。お釈迦様は言葉による見解を嫌いました。言葉は人間を惑わし、騙し、誤解を生じさせ物事の本質を捻じ曲げてしまうものだからです。

量子力学も言葉による理論は人間枠での見解で制限されてしまい、物事の本質を伝えきれないジレンマに陥ります。そのため言語を超えた数学、数式で物事を実証しようと試みます。宇宙の真理を言葉で解説をすれば辻褄が合わなくなってしまいます。

空論も量子論もあるようで無い、無いけれどもある。有って無いようなもの、という解説になるため言葉による論理はすでに破綻しています。でもその言葉の概念を超えた世界が真理だということです。

■大乘仏教思想のナーガールジュナ

ナーガールジュナは古代インドの哲学者、科学者、医学者、僧侶などいろいろな肩書を持った天才で釈迦滅後 600 年後くらいに活躍した第二の釈迦と言われている人です。ナーガールジュナは何をした人かという仏教思想の代名詞ともいえる世界的認知度の高い「空思想」の確立者で意味が難解で、漠然としていた「空」の思想を理論的にまとめあげた天才です。

この本ではロヴェッリはナーガールジュナをお気に入りのようですが、彼はナーガール

ジュナが何を伝えたいのかに興味を持っているわけではなく、ナーガールジュナの思想が今の自分に何のヒントが与えられるか？それは現代科学にとって実用的なものに成りうるのか？が知りたかったのだと言います。

それを聞くと仏教とは、まさにそのための教えであり、実践用の活用ツールであるのだと申し上げたい気持ちになります。

■「空」とは？ナーガールジュナの主張

では「空」とはいったい何でしょうか？ナーガールジュナが提唱した中論の解釈「これはリンゴである」「これはリンゴではない」「これはリンゴではなく、リンゴで無いこともない」と、言う。とんでもない、ややこしい論理形式で物事を表現します。

空の世界観「四句分別」

1	肯定	Aである
2	否定	Aではない
3	肯定かつ否定	Aであり且つAではない
4	肯定でも否定でもない	AであるのでもなくAでないのでもない

この句は「四句分別」といい1. A 2. 「非」A 3. Aかつ「非」A 4. Aでもなく「非」Aでもない という形式であり、これは理論的には成り立たないにしても言葉では通用しない世界観がこの世の真理なのだと語っています。

つまり全ての境界を越えたニュートラルな世界線「中道」に真理があり、そこに到達することが悟りだと示します。

これが中論の概要です。

もしナーガールジュナが現代の物理学者だったら、彼は量子をこのように提唱したでしょう。1. 量子は粒である 2. 量子は波である 3. 量子は粒であり波である 4. 量子

は粒ではなく波でもない

私たちはいつも A か B か。誰がやった？何のためにするの？どっちが正しい？と、物事を両極端にジャッジしようとしします。それは太極の白か黒かをジャッジするようなものです。太極は二つを併せ持つて一つの世界が作られており、そのどちらか一つを選ぶことは不可能です。その太極を超えた世界が宇宙の真理だと示します。「空」は何もないという虚無主義的な思想と捉えられがちなのですが何もないという意味ではありません。

「空」は「有」を否定します。そして「有」がない以上、それと相関関係にある「無」も当然あり得ないことになります。

「有」でもない「無」でもない。「有」と「無」二つとも排斥して両者を超越した世界それが「空」であり、「空」の境地に達するならばそれがニルヴァーナ「悟りの世界」であるということになります。

この世界は有と無という仮想的な要素が両立する仕組みであることを認識し、さらにそれらの概念を超越する必要があるようです。その真理が「空」であり、それは全てのしがらみから解放された悟りの世界で、天界、神の世界、真理の「場」であるということです。

最後にロヴェッリは仏教の教えをこのように伝えます。

「ナーガールジュナは現代の物理学者にヒントを与えてくれた。そしてナーガールジュナの「空」は私たちに実に心安らぐ世界を与えてくれる」と言います。

「自分が自立的な実体として存在しているのではない」という悟りは、自身を執着や苦しみから解放してくれるからです。私たちはイメージのイメージでしかない。現実 is 薄いヴェールでしかなくその向こうには何もないのです。これが現代の量子論を語る学者の最終的に達するであろう究極なのです。

彼らはその何もないヴェールの世界を敢えてそれらが何なのかをつきとめ、数式で示すことに使命をもつ科学者です。何もない真理の世界を物質世界の枠組みに収まった人間がどこまで迫れるのか今後の量子論がどのように発展してくのか本当に楽しみです。

仏教の伝える真理を現代で科学的に解明できるのは量子力学がその役目を担っていると私は個人的に期待しています。いつかこの世が解明される日は来るのでしょうか。そのころ私はもうこの世にはいないと思いますが「空」の世界から人類の発展を眺められると良いなと思ってしまいます。

今日は、「古代の仏教理論」と「現代の量子学」がとても共通点が多いというお話をしました。ロヴェッリの言葉からも 2000 年前の仏教哲学者が現代の物理学に影響を与えていることは確かだということが分かります。

仏教はインドではすでに衰退しており、中国や韓国も、仏教人口はかなり少なくなっています。

日本は、仏教の伝播ルート最終地であり、その伝統を今でも守り続けている国の一つです。いな。また仏教がこれほど世界に認められ興味をもたれている時代に、日本の誇れる伝統文化として、更に盛り上げて次世代へつないでいきたいと思います。

高次元経営より

仏教は余りにも広く・深く・高く・余りにも巨大。

よって、

触れたところを知って、

そして、それ(触れて知った内容)が普遍性を持つからといって、

それ(触れて知った内容)単独が全てではなく、

それら全てを統合する「関係性」に本質がある。

つまり、

仏教は、何故？ 多くの宗派に分かれているのか？

世界は「関係」でできている (2021 年著)

カルロ・ロヴェッリ著

イタリア/1956 生れ



科学界最大の発見であり、最大の謎とされる量子論。

はたして量子論の核心とは何か、

それはどんな新しい世界像をもたらしたのかを、研ぎ澄まされた言葉で明快に綴る。

量子は私たちの直感に反した奇妙な振る舞いをする。

著者によれば、

この量子現象を理解するためには、

世界が実体ではなく、関係にもとづいて構成されている

と考えなくてはならないという。

さらにこの考え方を踏まえれば、

「現実」や「意識」の本質は何か、

といった哲学的な問いにも手がかりが得られるのだー。

深い洞察と詩情豊かな表現にいろどられ、

私たちが“真実”をめぐる旅へといざなう興奮の著！

【解説】

竹内 薫 たけうち・かおる

1960 年、東京生まれ。東京大学理学部物理学科卒業。

マギル大学大学院博士課程修了。理学博士 (Ph. D)

サイエンス作家

ルネサンス的な知性による本

この本の著者カルロ・ロヴェッリは、1956 年にイタリア北部のヴェローナに生まれ、ボローニャ大学、パドヴァ大学に学び、欧米の複数の大学で量子重力理論を研究してきた。美しい文体のわかりやすい物理学書を何冊も書いていて、ガリレオ文学賞なども受賞している。

イタリアといえば、ミケランジェロ・ブオナローティやレオナルド・ダ・ビンチなどルネサンス期の大家の名が思い浮かぶ。ミケランジェロは芸術家として有名だが、建築家・詩人でもあったし、レオナルドに至っては、音楽、数学、建築学、物理学、解剖学、地質学、エトセトラ、エトセトラ、専門分野が多すぎて列挙することすら難しい。

ロヴェッリも彼ら同様、博識で、この本にもそのようなルネサンス的な知性がにじみ出ている。実際、量子物理学の解説書だと思ってこの本を手にした読者は、良い意味で期待を裏切られるだろう。ピランデルロ？ ボグダーノフにレーニン？ 誰それ？ 文学なの？ 政治なの？ 物理学の本じゃないの、これ？

たしかに、日本の感覚だと物理学は「超理系」「難しい数式だらけ」「複雑怪奇な実験設備」といったイメージが強いかもしれない。だが、それは、明治期に欧米から完成形の物理学を輸入してしまったからなのだ。物理学をルーツにまで遡れば、それはあくまでも「自然哲学」であり、この世界の仕組みをひもとく思想であり、その道具として数式や実験が使われるにすぎない。思想であるからには、文学や芸術や哲学などが渾然一体となって物理学者の脳裏を駆け巡るわけで、この本は、いわば量子物理学の真髄を解き明かした本なのだ。

この本は、量子力学の黎明期に活躍した偉大な物理学者たちの思索の過程と人間模様から始まる。次に、モノの姿が立ち消えてコト(=関係性)が主役の座を奪っていく、現代思想としての量子力学の世界が描かれる。そして、最終的に人間の意識や意味といった(科学では解明できないと多くの人が主張する)分野にまで果敢に斬り込んでゆく。

ロヴェッリの専門分野についても一言。

現代物理学の最大の難関の 1 つが、アインシュタインの重力理論(=一般相対性理論)と量子力学の統一だ。これは、アインシュタインの見果てぬ夢であり、今でも世界中の物理学者たちが、この問題に取り組んでいる。そこにはさまざまなアプローチがあるが、ロヴェッ

りは「ループ量子重力理論」の研究者である。

この世界は素粒子からできているわけだが、その素粒子同士の相互作用のネットワークを観ていくと、あるとき「待てよ、最初に素粒子があつて、それらが反応し合うのではなく、相互作用のネットワークの節(結び目)をわれわれが素粒子と呼んでいるにすぎないのではないのか?」という哲学的に疑問に突き当たる。まあ、鶏が先か卵が先か、みたいな感じである。もともとはイギリスの数理論物理学者ロジャー・ペンローズのアイディアら端を発するのだが、その発展形こそがループ量子重力理論であり、ロヴェッリはこの分野の先駆者なのだ。

量子力学の幕開け

本書の第一部は、弱冠 23 歳の物理学者ハイゼンベルグのヘルゴラント島でのひらめきから始まる。

「わたしはよく、思いを巡らしたものだ。若きハイゼンベルグは、海を見下ろす岩によじ登りながら、いったい何を考え、何を感じていたのだろう、と。北海の風が吹き抜ける荒涼としたヘルゴラント島で、波立つ広大な海と向き合って日の出を待ちながら、いったい何を思っていたのか、人類が覗き見たことのない、めくるめく自然秘密を知る最初の一人となった、そのすぐ後で。しかも彼は、弱冠 23 歳だった」(17 ページ)

まるで小説のような書き出しだが、偉大なアイディアは、必ずしも大学の研究室ではなく、自然の中や真夜中やシャワーを浴びているときに思い浮かぶというから、ハイゼンベルグの場合も例外ではなかったのだろう。

さて、大学の理系に進むと、微分積分と並んで「行列」なるものの計算が必修になる。微分積分を学ぶのは、ニュートンとライプニッツが発見したせいだが、行列はハイゼンベルグが、量子力学に使われる^{あらた}新手の数だと見抜いてしまったせいである。

数の表であるはずに行列が、ふつうの数の代わりに使われるなどと聞くと読者は驚くかもしれないが、これはいわば、これまで個人しかいなかった数の世界に、団体としての会社が参入したようなものだ。

頻繁に登場する「オブザーブル」という言葉もなにやら難しげだが、要は、直接、実験装置などで観測できる量という意味である。われわれは東京から大阪に出張した人の話を聞けば、途中、静岡を通ったのだろうと推測するが、途中経路はオブザーブルではない。新幹線を使わずに飛行機で行ったかもしれないし、場合によっては「出張」と言ってもオンラインだったかもしれない。証拠写真を撮って観測しない限り、途中の経路について語ることは意味がない。それを徹底していくとも素粒子が動いているときも、途中の経路について語ることはご法度になる。それが量子力学なのだ。

現代の理系大学生を悩ます問題は、20 世紀初頭の物理学者たちも悩ませた。行列の計算は面倒くさいのである！ そこに颯爽と登場した救世主がシュレーディンガーだ。

「当時のシュレーディンガーは、妻のアニーと妊娠中の愛人ヒルダと暮らしていたが、ヒル

ダはシュレーディンガーの助手の妻だった。その後、アメリカに移る話もあったが、結局それも頓挫した。ポストをオファーしてきたプリンストンに対して、生まれたばかりの小さなルートを育てるために、1つ屋根の下でそろって暮らしたいと申し出たのだが、名門大学としてはこのような家庭をとうてい容認できなかったのだ。そこで三人はさらなる自由を求めて、アイルランドのダブリン大学に移った。ところがそこでも二人の学生に子供を産ませ、スキャンダルにまみれることになった・・・」(33 ページ)

いやはや、**天才、色を好む**、ということなのだろうか。ともかく、シュレーディンガーは、当時の人々が使い慣れていた波動方程式の形に量子力学をまとめ上げた。しかし、それまでの音波や電磁波をあらわす波動と異なり、量子の波動は抽象的な「確率の波」を意味するのではないかと、大きな論争が巻き起こった。

アインシュタインやシュレーディンガーらは、量子の波も音波や電磁波のように実在する波だと考えたのに対して、ハイゼンベルクやボルンらは、量子の波は(この世には実在せず、数学的な抽象空間に存在する)確率の波だと主張したのである。

さて、この本に出てくる唯一と言っていい数式がこれだ(48 ページ)。

$$X P - P X = i\hbar$$

Xは素粒子などの位置の量をあらわし、Pは運動の量(重さに速さを掛けたもの)をあらわす。ともに行列である。よく小学生の算数の問題で掛け算の順番なるおかしい概念を主張する先生がいるが、ふつうの数の場合、掛け算に順番は存在しない。しかし、行列の掛け算になると、順番が大事になる。順番を間違えたときの「差」がプランク定数と呼ばれる、めちゃめちゃ小さな定数なのだ。この数式は、実は、後に出てくる、量子の「情報」が有限であることと深く関係している(いわゆる**不確定性**)。

第一部には、実に大勢の物理学者が登場するが、読者はその個人的なエピソードを楽しんでもらいたい。そして、天才たちが、量子の性質について丁々発止の議論を戦わせていたことを知って欲しい。議論の詳細がわからなかったからと言って落ち込む必要はない。天才中の天才であったファインマンでさえ「量子は誰にも理解できない」と呟っていたのだから。

量子力学の解釈

量子力学の「意味」を知り、いまだに物理学者たちは派閥を作っているように見える。ロヴェッリは、その代表的なものとして、多世界解釈、隠れた変数の理論、そしてQBイズムを挙げている。

「多世界解釈」では、SFのように、量子の可能性(確率)に応じて無数の並行宇宙がある、と考える。だが、哀しいかな、現実となったわれわれの宇宙「以外」の宇宙と通信することができない。よって、その存在を証明することは不可能だ。

「隠れた変数の理論」は、東京から大阪に出張したのならば、途中の経路は存在したはずだ、という素朴に直観に訴える解釈だ。しかし、この解釈は(アメリカを追放される憂き目に遭った)ボームがぎりぎりまで定式化したものの、複数の量子がある場合やアインシュタ

イの相対性理論との相性がよろしくない。そして、ベルが考案した不等式(経路があるかないかで、実験に差が出る)の不成立によって、息の根を止められたのだった。そう、量子には隠れていようがいまいが、**経路という変数は存在しない!**

QBイズムは、主観確率(ベイズ確率)と深く関係しており、ロヴェッリは「わたし」の視点から世界を見る点を弱点だととらえている。

このような解釈の代替案としてロヴェッリが主張するのが「関係性」である。この発想のルーツはアインシュタインの相対性理論にある。それまでの(素粒子や原子や人間や惑星といった)モノが主役の座を追われ、(相互作用や対称性といった)関係性のネットワーク、すなわちコトが前面に出てくる。相対性理論では、観測者によって事実が異なる。時間の進み方や空間の長さも異なる。しかし、観測者同士は、変換式を使うことによって、互いの証言の食い違いを知ることができる。みんながバラバラの観測をして混乱するのではなく、相対性理論の数式を通じて「翻訳」が可能なのだ。この状況を「間主観性」と呼ぶ。

実は、量子力学は、観測の仕方によって事実が異なるため、相対性理論と同じく間主観性の理論であり、関係性の理論である。箱の中にいる猫という観測者と、箱の外から観測している人間とで、猫の状態に関する事実とは異なるかもしれない。だが、量子力学の計算をしてみれば、必ずしも相手が間違っているのではないことがわかる。つまり、翻訳可能なのだ。

第二部にも難解に感ぜられる概念がたくさん登場するが、たとえば「情報の有限性」は、コンピューターのメモリーを思い浮かべるだけで、あたりまえだと理解できるはずだ。無限のメモリーを持つコンピューターなど存在しない。メモリーに蓄えられた情報は常に有限だ。

あえて、このあたりまえのことを強調しなくてはいけないのには理由がある。ニュートンが確立した古典力学では、素粒子の位置も運動も、無限の精度で観測・測定できるとされた。それは、情報が無限の、いわば理想世界の物理学だったのだ。

それに対して、量子学では、素粒子の位置を観測しようと思って光子をぶつけたとたん、その光子の衝撃によって素粒子はどこかへ弾き飛ばされるから、もはや運動状態を測定することができない(ハイゼンベルクの不確定性)。情報は有限なのだ。

哲学的な、あまりに哲学的な

というわけで、素粒子の関係性のネットワークが自然界の本質だと看破したロヴェッリの専門分野がループ量子重力理論であることはきわめて自然だ。**モノからコトへ**、そして間主観という現代哲学の1つの到達点にロヴェッリが**山の反対側からたどり着いたのも理論的な帰結だ**と言える。

第三部では、さらに話題が広がり、われわれにとっての「意味」や「意識」などが考察される。「関係」の数式だけを駆使することで、そういった人間の主観的な経験までもが説明できる、というロヴェッリの主張は斬新かつ挑戦的だ。東洋に住む我々にとって、**色即是空**といった言葉は幼少期から馴染み深い**が、西洋物理学は、アインシュタインの相対性理論と量子力学に至り、まさに自然の色即是空に理論的に肉薄した。**そしてロヴェッリが推し進め

るループ量子重力理論は、(相対性理論と量子力学を統一して)最終ゴールになだれ込もうという試みなのである。

この本の最大の魅力は、おそらく、色即是空と現代物理学の共通点をわかりやすく説き起こした点にある。

物理学を専門的に学んだことのない読者には、現代物理学は哲学である、という強いメッセージが伝わったはずだ。そして、ある程度専門的に物理学を学んだことのある読者にも、数式や実験の背後にある偉大な先人たちの思想こそが、この学問の真髄であることが、改めて、伝わったのではないか。

永く読み継がれるべき、物理学の名著の誕生である。

— 訳者あとがき —

【訳者】

富永 星 とみなが・ほし

1955 年、京都府生まれ。京都大学理学部数数理科学系卒業。

一般向け数学科学啓蒙書などの翻訳を手がける。

2020 年度日本数学会出版賞受賞

これは、カルロ・ロヴェッリによる一般向けの第六作 *Helgoland* (ヘルゴラント島) の、イタリア語版と英語版にもとづく日本語全訳である。

前作の『時間は存在しない』も刊行と同時に世界的なベストセラーになったが、その3年後の2020年に本書のイタリア語原書が、そして2021年に著者自身が手を入れた英語版が刊行されると。またしても大評判となった。イタリア本国での発行部数はすでに12万部を超えており、現時点で23ヶ国での刊行が予定されている。

イタリア語および英語版のタイトルこそ『ヘルゴラント島』といたってシンプルだが、米国版には「量子革命を理解する」という副題がついていて、実際この作品は物理学における量子論誕生のドラマから説き起こされている。しかし、「ということはつまり物理の本で、『理科系の人』向けの読みものなんだな」と決め連れるのはいかにも早計だ。なぜならロヴェッリと対話した人々は、次のような感想を寄せているのだから。

「あなたのこの本には、私が『ライラの冒険(数々の賞を受賞したファンタジー小説シリーズ)』を書きながら見出したことが書かれている。・・・アプローチはまったく異なるが、わたしたちは同じことをしようとしている。・・・(本文118ページのナイフの例のように)科学的な主張を、優れた文学的比喩によって正確で具体的なイメージとしてみごとに展開

している。」(イギリスの作家フィリップ・プルマン)

「描写のみごとさには感服するばかり。・・・あなたが提唱している解釈には、私の彫刻作品を見た人々が、各自のバックグラウンドにもとづいて何かを感じ、さまざまなリアクションを起こす際の多様性に通じるものがある」(現代美術家コンラッド・ショウクロス)

これらの感想からもわかるように、この作品には「文学の人」や「アートの人」の心に訴える何かがある。

その一方で、『素数の音楽』の著者で数学者のマーカス・デュ・ソーティは、「ぼくが量子論を理解できたのは、ロジャー・ペンローズとこの本のおかげだ」と述べている。実際、本書の核にはもっとも成功した物理理論でありながら未だに不可解とされている量子論が据えられており、著者はその謎とされてきた部分にまっすぐ切り込んでいる。とはいえこれだけ薄くて小さな本では(イタリア語原書は新書判で、本文は200ページ)、さまざまな事柄を畳みかけるように説いて読者の納得を得ることは、まず不可能だ。だいいち量子論の謎を巡っては、今も数理物理学の分野で活発に専門家の議論が続いており、とうていこの分量で語り尽くせるはずがない。

そこでロヴェッリはこの作品を本文と注の二段構えにして、従来一部の専門家だけが関心を持ってきた問題を、より多くの人々に開放しようとした。まずはすでに定評のある“物理学の詩人”としての筆力を駆使して、とことん選び抜いたトピックを研ぎ澄ました言葉で紹介することで、物理学や量子力学の素養の多寡にかかわらず、読者を疾走感に満ちた満足いく「知の旅」に誘い、物理学の深さや面白さに触れてもらう。そこでは、量子力学やその誕生にまつわる諸々の事柄、その謎、さまざまな解釈などが紹介され、折に触れて科学や物理学や形而上学などに関する見解が披露される。

それは実にスリルに満ちたガイド付きツアーで、読み手は、時には疑問符で頭をいっぱいにし、時にはなるほど、と膝を打つことになる。一人一人の読者が、「各自の背景にもとづいて何かを感じ、それぞれに固有のリアクションを起こす魅力的な読書体験をするのだ。

そうはいっても、時には気になったトピックを深掘したくなることもあるだろう。そんなときにはロヴェッリが用意した、本文の長さからすると膨大ともいえる計146個の注が役に立つ。さらりと触れてあったあのトピックについてもうちょっと知りたいなあと思ったら、それらの注にあげられている資料をひも解いて、のんびりと楽しめばよい。著者の序文(「深淵をのぞき込む」)にもあるように、それらの注の一部は専門家向けなので、日本語に訳されていない著作や原論文も含まれているが、その一方で邦訳されている一般向け啓蒙書やオリジナルの論文(アインシュタインやシュレーディンガーの画期的な論文の一部も、日本語で読むことができる!)も相当あがっているの、そこからアプローチしたり、さらにさまざまな啓蒙書に当たってみれば、ロヴェッリの語る物語の厚みを改めて実感することができる(たとえ数式が登場したとしても、門外漢の読者は全ての理解する必要はなく、雰囲気だけを楽しむという特権がゆるされているわけで…)

つまり、この作品は、コンパクトで完成度の高い独立した存在であると同時に、量子論や

物理学のさまざまなトピックのブックガイドとしても使えるのだ。

本書の根っこには、「コペルニクスの地動説、ダーウィンの進化論、アインシュタインの相対性理論、科学はすでに人々の世界観を深いところから変えるような理論をいくつも打ち出してきたが、そろそろ量子論をその仲間に加えるべきだ、なぜなら量子論は人々の世界観にそれだけのインパクトを与えるものなのだから」というロヴェッリの主張がある。だが、そのような主張が説得力を持つには、摩訶不思議に見える量子現象と日常生活での実感が矛盾なくきちんと接続されていなくてはならない。そこでロヴェッリは、一見奇異な量子現象をどう捉えるべきかを突き詰める一方で、それらの減少と両立しそくない日常生活での実感や従来の世界観を丁寧に見直していった。こうしてミクロレベルの量子現象とマクロレベルの「現実」とをすりあわせたうえで大胆に提示されたのが「関係に基盤を置く量子力学解釈」であり、そこから生まれた独自の「現実」観、世界観なのだ。

哲学の界限でも神経な分析の対象となっているロヴェッリの解釈は、じつはエルンスト・マッハ以来の伝統をきちんと継承している。自身も物理学者だったマッハは、従来の力学の歩みを再検討したうえで、科学は「絶対普遍」な存在を大前提とする「形而上学」から自立すべきだと主張した。「関係によって定まる属性だけが存在する」というロヴェッリの見方もまた、「絶対不変な物質」という形而上学的概念からの解放なのだ。ロヴェッリはハイゼンベルクの方程式が指し示すところをあくまでも素直に受け止め、「形而上学からの自立を目指した」結果、「関係を基盤に置く量子力学解釈」にたどり着いた。マッハによれば、科学は現象の関数的な関係を「思考経済の原理」に従って、つまり余計なものを排して極力コンパクトに記述すべきなのだが(第三部)、その点でも、ロヴェッリの解釈はマッハの基準を満たしている。

それにしても「関係性に基盤を置く解釈」から導き出される結論が、じつははるか昔の仏教哲学に通じていたというのは、ロヴェッリにとって意外な発見だった。日本に暮らすわたしたちは、日常生活にさまざまな形で仏教が入っているからこそ、このつながりにどれくらいの強度があるのか(単なる東洋趣味なのか、そうでないのか)について、安易な断定を慎むべきだろう。だが逆に日本だからこそ、仏教哲学の一般向け書籍や専門書も多数刊行されており、実際に自分で調べてみることもできる。

この作品を読み進めていって、一つ「ん?」と感じるのが、第五章の前半のbogdanovを巡る記述だろう。bogdanovとレーニンとの論争が「科学的な姿勢」についての典型的な議論であったとしても、そのような議論はほかにもいろいろありそうなのだが…。それはおそらく、ロシア革命の時代、さらにはbogdanovという人物のなかで、「科学(的思考)」と社会がもっとも直接的に絡み合っていたからなのだろう。はじめはごく限られた人の関心事でしかなかった科学だったが、18世紀以降の急激な技術の発展とともに、社会や知の世界における「科学」の存在は急激に増し、さまざまな分野で「科学的手法」や「脱形而上学の姿勢」が強烈に意識されるようになった。その流れでマッハの科学哲学やマルクスの史的唯物論が登場したところに、ロシア帝政が崩壊し、新たな国を造るという緊急の課題が

生じた。新たな国を造るといっても、その百数十年前のアメリカでは、社会の形としては従来の資本主義を採用し、合衆国憲法に知的財産を明記するという形で科学を社会に組み込んだわけだが、ロシアの場合は、すでに従来の社会のあり方を相対化するマルクスの思想が登場しており、「科学としての」史学、社会学を社会の基礎作りに役立てようという機運があった。そんななか、科学者としての素養があったボグダーノフは、マッハのいう科学的思考を大きな柱とした国造りを考えていたのである。

ロヴェッリは一貫して、自分と(科学と)社会の関りを意識してきた。この世界の謎を知るために物理学を修めようと決意した後も、社会との関わりを求めて学生活動に参加し、さらに北米大陸を放浪した末に、物理学を通して社会とかかわる、という新たな決意とともに大学にもどっている。また、前述のショウクロスとの対話でも、自分の解釈は「コペンハーゲン解釈の民主的バージョン」だと述べており、この言葉の選び方からもロヴェッリの姿勢の一端をうかがうことができる。そのようなロヴェッリだからこそ、ロシア革命における科学論争とボグダーノフの例を紹介する事にしたのである。

著名な理論物理学者ブライアン・グリーンとロヴェッリは対談の中で、「自分たちが書く本は、理論的には、読了した人が、物理学によれば価値や意味のないこの世界に生きてる自分に満足し、死ぬと分かっている自分の存在に満足できるものでなければならない、物理の語りによって安眠を妨げてはならない」、「基礎物理の説明から哲学の説明まで、さまざまなアプローチを理解したとき、それらは別々の洞察を与え、それらの洞察の集合体(統合体)が、わたしたちにもっとも満足のいくこの世界の像を与えてくれる」という点で意見の一致を見ているが、このような開かれた姿勢もまた、本作の特徴といえる。

ここでもう一つ、「開かれた姿勢」を巡るロヴェッリの工夫を紹介しておきたい。

イタリア語原著の本文には、*realta*(英語版では *reality*)という言葉が計 120 回登場する。つまりこの単語の意味するものが重要なテーマなのだが、この単語は(1)日本語の「現実、実際」といった日常的な意味から(2)哲学で使われる「実在」という意味までカバーしており、本書でも時と場合によって、この両方の意味を行き来している。ところが(2)の場合に正確さを優先して哲学用語に置き換えてしまうと、哲学になじみのない読者にとってはその用語自体がハードルになる。しかるにロヴェッリは一貫して同じ言葉を使い続けているから、哲学になじみのない読者も余計な負担を感じずにすむ。いわば *realta* という単語がこの作品を貫く縦糸となって、哲学になじみのある人はある人なりに、(そしてロヴェッリはもちろん、なじみのないひとにも本質が伝わるように書いているので)ない人はない人なりに、読書を楽しむことができるのだ。このような言葉選びにも、この話題を狭いサークルに閉じ込めまいとするロヴェッリの姿勢が反映されていると見てよいだろう。

本人曰く「ハードコアな唯物論者で、自然主義者で・・・、一般向けの講演会の前には大木を抱擁してエネルギーをもらう」というロヴェッリの懐の深さが存分に活かされたこの作品を、どうか皆さんも楽しめますように。

宇宙は、出来事の集まりである

『 時間は存在しない 』（2019 年著）

カルロ・ロヴェッリ著



エンタングルメント —— 観測者によって変わる

これまで、

場所と時間が重ね合わせとなった選択肢が出来ているのなら、光(時間)に意味はない。
この世界は存在する何かによって、編み上げられた物理現象である、と考えられていた。

宇宙はものの集まりではなくて、出来事の集まりなのです。もっと分かり易く言うと、宇宙は、石(物質)で出来ていないのです。キスで出来ているのです。

時間とは、ある場所にある点ではなくて、ある時空の出来事同士の中だけに在る出来事なのである。つまり、関係性である。

“ あのキスは、明日は何処に、どう在るか? ” など、言い当てられない。

“ あの星座が気になるなあ〜 ” と思った瞬間に、その星座との時間が進み始める。

「思い」がなければ、「時間」は存在しない。

整然としたシンガポールではなく、無秩序なナポリである。

何が起こるか分からない!! 俗に良く言われる‘時間を制する者は・・・’とかない。
時間の中に在るものだけが存在するのだ。

無秩序な出来事の中に生きている「命」を考えるなら、

“ 何の為に生れてきたのか ”

もしも、時間が出来事の発生事態を意味するのならば、
あらゆるものが時間であり、時間の中にあるものだけが存在するのだ。

「現実」を支える「現在」は「出来事」であり、

「客観的」で「全体的」な「現在」は存在しない。

私という存在が現在を刻んでいる。

これは間違いない。

「時間」というのが在るから「私」が存在しているのではない。

つまり、

私たちが“出来事”なのです。

何の為に、私たちは時間を意識できるのか(持っているのか)

私が私で在る必要が、何故、あるのか？

誰かの、何かの為に、**存在が在る。**

Jの独り言

天職って、もともとから好きな仕事なのかなー。違うと思うなー。

縁があってその仕事と出逢い、必死でやっているうちに、色々と深くなり、苦しみ、喜び、情けなさに泣き、怒り、悲しみ、悔しさ、そして楽しみ、憧れ、尊敬し、心震わせ…自分と、自分の人生と仕事が一体となってきた、そして、共に仕事をする者たちが大好きになって、大きな輪を感じ、誰かの役に立てる事へのしみじみとした感謝、この仕事が出来ているお陰だなあと、また感謝し、この仕事が好きになって、遣り甲斐を感じ、発見してしまった…そんな仕事…の気がする

Jの独り言

—時間は存在しない—

生物(人間)は、誕生し、成長し、成熟し、老い、そして死んでいく。

それが理(ことわり)。

その流れをヒトは感じ(観測し)、そこに「時」という概念を創造した。

つまり、「時」があるから、老いていくのではない。ってこと??

目覚めよ 日本!

— 新しい地球を創造するために —

新地球への大展開が、ダイナミックにはじまる!

神々に守られた国・日本と、そこに棲む私たちの役割とは?

あなたが、自分自身の救世主となって生きるために大切なこと



**今こそ、日本が目覚め、
国として、人としての誇りを取り戻す!**

まえがき

この本を手にとってくださって、本当にありがとうございます。

きっとタイトルに惹かれた方が多いと思います。

私たちの魂さんは、今回の人生を神に守られている日本で過ごしたいと、しっかりと選んで生まれてきました。そして自然が豊かで、気候も温暖で四季がある穏やかな国で暮らしてきました。

日々、神をずっと意識して生きている日本人は多くはないかもしれませんが、無意識のうちに神々の守りを感じている人は多いと思います。

あなたも、その大切なおひとりです。

神の国、日本に住んでいると、自分の内なる神が日々反応して、波動の高い響きを自然に奏でるようになり、とても心地よく感じる事ができるのです。

あなたの中の内なる神の意識が、かなり表面意識に近づいていて、これからの日本に必要なことが書かれているこの本を選んでくださったのだと思います。

これから日本は、国としての役割に目覚めます。

地球の波動を上げて5次元にアセンション(次元上昇)し、新地球になっていくために大活躍をします。

そのためには、まずは個人の目覚めが大切なので、先に前著『目覚めのヒント』(徳間書店)を書きました。そしてこの本の依頼があり、素晴らしい流れです。

大きな時代の流れの中で、日本はそろそろ目覚めた、それぞれのお役目を果たすときが来ています。そのためにこの本が世に出ることになりました。

天皇を中心とした日本という国は、約 2500 年も続いてきた、世界最古の国です。
たくさんの神々に守られて、今日まで日本という国を続けてくることができました。

日本はすでにたくさんのお金と文化を世界中にばらまき、地球を助けています。
ジャポニズムが世界に広がっているのです。特に漫画やアニメ、映画などが文化の発信源として大活躍しています。

私は薬を使わないユニークな精神科医です。アロマとクリスタル、ハンドとヴォイスヒーリングを使って、愛と笑いの過去生療法をおこなってきて、29 年目を迎えました。クリニックに来て下さるいろんな患者さんの人生の謎解きを通して、人生のしくみがいろいろとわかってきました。本書では、それを解説しながら、これからどのように日本が新地球へのリーダーシップを取って行くのかのヒントになればと思っています。

ちょうど、新地球への大展開が起きるハイライトが辰年と巳年だと言われています。
まさにこの本が出る **2024 年の辰年**は、ダイナミックな変化が次々と起きています。
これから、経済も、医療も、教育も、生活の仕方が大きく変わっていきます。

太陽系で、先にアセンション(次元上昇)した金星のように、それまでの貨幣経済から、必要なものはすべて手に入る夢のような世界に突入していきます。

アリーナ席で地上の変化を堪能しましょう。私もどのように地球がユートピアの世界になっていくのか、**わくわく**とても楽しみです。

あなたのこれからのユートピア活動が、この本でますます楽しくなっていきますように。心から願っています。

2024 年辰年 8 月吉日

人生の楽々インスト楽多〜笑いの天子 越智啓子

越智啓子 おちけいこ

精神科医。東京女子医大卒業。東京大学附属病院精神科で研修後、ロンドン大学附属モズレー病院に留学。帰国後、国立精神神経センター武蔵病院に勤務。1995 年、東京で「啓子メンタルクリニック」を開設。1999 年沖縄へ移住。アロマ、クリスタル、ハンド、ヴォイスヒーリングを取り入れた、愛と笑いの過去生療法を続けている。沖縄の恩納村でクリニックや、海が見えるカフェ「天の舞」と研修施設「海の舞」を根拠に、講演会、ワーク、セミナーなどを東京、名古屋などで行っている。

本 講

ここから、次元が変わります。

— 第Ⅴ期 第4講（8月23日）からの続き —

〔一〕 有機体システム思考に基づく宇宙を支える 3 つの原理

[2] 有機体的システムがもたらす相互共存の原理

② 相互共存の原理

自己組織系システムを構成する、あらゆるレベルの要素は、**関係的にのみ存在し、自立的実体として存在するものではない**。この要素と要素の**関係性と連動性**から、緊密な**相互作用**が起き、新しい秩序が形成される。ここでは、小さな要素のわずかな**<ゆらぎ>**でも、他の要素との**連動**によって**増幅**され、全体として大きな**変動**が現出する。

しかも、その**全体**の変動が、また、**要素同士**の相互作用に影響を与え、かくて、相互互換的に自己組織化が進む。この相互作用においては、**部分が部分の中に入り込み、全体が部分の中に入り込み、それぞれ緊密に絡み合っているから、その過程を要素に分解することはできない**。そのため、小さな部分の**わずかな変化**が、全体の**大きな変化**を呼び起こし、**新しい組織や形態**を自立的に創発させるのである。

〔一〕 有機体システム思考に基づく宇宙を支える3つの原理

〔2〕 有機体的システムがもたらす相互共存の原理

③ 相互共存の原理

自然に包まれないかなる**個体及びサブシステム**においても、例外はあり得ない。あらゆる存在は、**自己組織化の機能**によってその**存在が保証**されている事は、既に先述の通りである。それでありながら、決してその個々の個体が**無限に拡大**したり成長したり、**独善的な支配欲**を暴走させたりする事は出来ないように設えられている。そこに、相互共存・関係性の原理が活かされている普遍的な理由がある。

もし、この摂理(相互共存の原理)に異を唱え、挑戦したとしても成果に結びつかず、**フィードバックの過程**に従わざるを得ない状況に至るのは、まことに不思議なメカニズムである。つまり個人の願望を**達成する欲望**がいかに巨大であっても、それだけの条件では、その願望は達せられないのである。何故なら宇宙空間に包まれる一切の存在が、宇宙を構成する万物との**協調的關係性(相互共存)**の中でしか、その場所に存在する事が許されていないからである。

〔一〕 有機体システム思考に基づく宇宙を支える3つの原理

〔3〕有機体的システムがもたらす多様性価値の原理

多様性価値の原理

万物の個性が、
主体的能動的に関係し合う相互間の協力は、
間断なく万物の価値を創造的進化へと促す。
それは、
文字通り、統合的進化と謂うほかはない壮挙である。

自己組織系システムを構成する、あらゆるレベルの要素は、関係的にのみ存在し、自立の実体として存在するものではない。この要素と要素の関係性と連動性から、緊密な相互作用が起き、新しい秩序が形成される。ここでは、小さな要素のわずかなくゆらぎでも、他の要素との連動によって増幅され、全体として大きな変動が現出する。

しかも、その全体の変動が、また、要素同士の相互作用に影響を与え、かくて、相互互換的に自己組織化が進む。この相互作用においては、部分が部分の中に入り込み、全体が部分の中に入り込み、それぞれ緊密に絡み合っているから、その過程を要素に分解することはできない。そのため、小さな部分のわずかな変化が、全体の大きな変化を呼び起こし、新しい組織や形態を自立的に創発させるのである。

〔一〕 有機体システム思考に基づく宇宙を支える3つの原理

〔3〕 有機体的システムがもたらす多様性価値の原理

① 多様性の原理

- (1) 人間の価値は個性にある。真に個性といえるものは、他人との最高レベルの関係性の中でしか鍛えられ生成されることは無い。
- (2) 宇宙に包まれた万物を科学の知見で観察し判ったことがある。この宇宙間に存在する一切の万物に、ひとつとして同じものが存在しない事実である。宇宙は多様性の価値を知った上で創造したのだろうか。
- (3) 宇宙にとっての成長(進化)には、定量的範疇に収まるものはひとつもない。それは人間の質感でしか捉えられない意味や価値を通してしか把むことが出来ないものである。今後の21世紀における企業内間課題の多くは、量ではなく質がテーマになる。

〔一〕有機体システム思考に基づく宇宙を支える3つの原理

〔3〕有機体的システムがもたらす多様性価値の原理

②多様性の原理

全体と部分とは、対立しながら、相互に限定し合い、生成変化していく。新たな世界の生成は、全体と部分の矛盾葛藤から起きてくるのである。複雑系は、部分と部分が相互に限定し合い、全体と部分もまた相互に限定し合って、自分自身を形成していく創造的体系(システム)なのである。

世界は、どの成長段階を捉えても、多様性と関係性からなる複雑系である。多様な諸要素が相互に作用し合って、世界を形成するとともに、その世界が諸要素に映し取られて、世界は変動してやまない。われわれは、このような不斷に変化し続ける世界の一部である。世界は、刻々として新たな世界であり、片時も一つとどこに定まることはない。

世界は、間断なく自己自身を再配置し続ける動的な系(システム)である。世界は、そこにあるものではなく、絶え間なく生起する出来ごとである。宇宙、物質、生命、社会、あらゆる系(システム)の動的形成を探求する複雑系の科学の存在論的根拠も、ここに求められねばならない。存在は生成の軌跡なのである。

【一】有機体システム思考に基づく宇宙を支える3つの原理

[3] 有機体的システムがもたらす多様性価値の原理

③ 多様性の原理

宇宙において、最も広く認められる現象のひとつとして、あらゆる多様な物質形態の存在がある。原子から人間、そして銀河系に至るまで、ひとつの種にふたつとして**同じものは存在しない**。同様に、それぞれの銀河系は、他の数百億個から数兆個に及ぶ銀河の中においても、それぞれ固有の個性があり、明らかにそれらが互いに**区別**できる**特徴**をもっている。この**原理の恩恵**を受けて、宇宙空間の中に巻き込まれたすべての自然システムが、**独自性**という**個性を発揮**できるのである。

宇宙における**自然システムの典型的な特徴**、それは**物質とエネルギーの相互互換**の無限的繰り返しによって変化する**関係性の場**を通し、間断なく古い価値を新しい価値創造へと**変換する働き**にある。その際の返還のプロセスにおいて、新たに無駄が加えられたり、浪費(ロス)が生じることは一切あり得ず、そこに、自然そのものがもつ、常に最小のエネルギーで最高の価値を創造する仕組みを見てとることができる。それは即ち、自然界と物質とエネルギーを完璧なまでに**節約**しながら創造的に**再生産**しつづける姿であり、その明らかな証明こそが、宇宙全体に生きづく豊穡な**多様性**なのである。

— 前回の復習 —

2012 年 第 8 講 経営人間学講座

第 8 講「新しい価値を創造する「システム思考」の確立

— 竹内日祥上人ご講演の筆耕より一部抜粋 — ③

令和 6 年 8 月 23 日

《 第 5 期第 4 講 レジメ最終ページ・47 頁を再記載 》

もちろん宗教界の中に良くないものもあって、そこから守らなくてはいけないという社会正義があって宗教について語る人が少ないのかもしれませんが、ただ、**宗教学者が宗教について実存的な宗教を知らない**ということも確かです。

宗教の本質的な実存的価値について、一言も説明したことになっていない宗教家が日本人には非常に多いのです。やはり私は、日本のカトリックの神父様よりもヨーロッパの神父様の方に魅力を感じます。自分に嘘をつかないからです。

本当にこちらが宗教家だと分かったら尚のこと絶対本音で思っていることしか言いませんから魅力的です。ですから、ヨーロッパへ行ったら宗教家とお友達になって帰ってきたら良いのです。

こういう価値観が宗教によって生まれてくるのかと皆さんはびっくりされます。学生たちがやはり若いときに皆宗教家と出逢います。ドイツなどでも、高校生などいろいろな宗教家と出逢って良い影響を受けています。

日本にはそれがありません。日本の若者が可哀想だなと思います。

でも、いくつになってもそういうものに興味を持ちさえすれば、門をたたいて教会を訪ねたり、お寺を訪ねたりしようと思えばできないわけではないのですから、やはり、ご本人の問題だということでしょう。

このページの続きです →

②「相互共存」の原理

■自己組織系システムについて

自己組織系システムを構成する。あらゆるレベルの要素は、関係的にのみ存在し、自立的実体として存在するものではありません。

自己組織系システムを構成するあらゆる要素は、実体がありません。

自己組織系システムを構成するすべてのレベルの要素は関係的にのみ存在して、自立的実体としてはどの要素も永久実体ではないのです。

物理学者は、最初元素には実体があると思っていました。ところが、ある時期になって元素には実体がないことがわかったのです。というのはいわゆる高分子によって元素が成立しているのであって異なる高分子が集まっているだけであって、やはり実体はないということがわかったのです。それで、さらにその高分子の在り方を観ると、これがまた、実体がない。高分子を分析していくと、原子の集まりになります。

ひとつの原子で存在している場合、それからいくつかの異なる原子によって成立している分子というものがあって、原子そのものにも実体がない。それが更に細かく進んでいってクオークにいたってなお実体がないことが確かめられたとき、この世の中に実体のあるものはひとつもない。

全て関係性で実体があるかのように存在しているだけであって、関係性の構造が破壊され、消えてなくなったら無関係になるという状況になった時、何が起きるかということです。この大自然の秩序はいっぺんに解体されることになるでしょう。

科学の歴史は、関係性が構造を可能にして、構造的存在を保証しているのであって、関係性がいかに重大な意味を持っているかということを物理学者は認めざるを得ないことになってきた歴史です。

実体はありません。

ですから、

実体があるという前提で企業は全ての情報を分析の対象にしてきているのです。

数値分析がいかに実体を伴わないものであるかといわれている究極の論拠はそこにある

のです。数字で説明がつくとされてきたのは、要素には実体があると考えられたからです。

でも、実体がないとなると実体がなくとも現実が存在する。要素というのは、存在を支えている部分、部分の人間でいえば肉体の成立を保証しているのは細胞です。細胞は一個一個独立しているのです。

しかし、その細胞にも実体はありません。細胞と細胞の関係性があるだけです。そのようなことが科学の力でわかってきて、**科学は実体があるという前提でスタート**しましたけれども、今や科学の知るところでは、この宇宙に存在する全ての存在のバックに、根拠に、相当するもののどこにも実体はない。

これが実体だといわれる実体存在が証明されるものはこの宇宙空間の中に何もものない。

システムの構造は、要素と要素の関係性でそのシステムの構造が成り立っているだけであって、その構造はあっても、実体はない。要素を分解すると、要素を支えている、最初の要素である分子になります。

その分子を構成している要素はどうかというと、これまた実体がなく、関係性の構造だけがその分子の存在を保証していることになり、つまり、実体のない・関係性がある・存在の積み重ねがシステムを生み出して、そして現実の物質が成立しているのです。

物質は元素で成立している。ですから元素の一つひとつに実体があるのではないかと思われていたのですが、元素を成立させている要素の一つひとつは分子ですから、その高分子には実体はないということがわかった時に、「**実体のない宇宙**」という言葉が出てきたのです。

実体がないのに、なぜ宇宙が存在して、人間が存在するのか。

それは個々の実体があるかのように見える、その要素が個々の実体として存在しないだけでその存在を下で支えている。それは関係性という構造がそれぞれの要素の存在を支えているので、あたかも実体があるかのように見えるのは錯覚です。それは関係性が要素と要素を支えている。関係づけているものがあるからです。

ですから夫婦もそうです。

関係性が先にあって夫婦がその関係性の上に載っているだけです。

夫婦になって初めて夫婦が夫婦の関係性を見つけました。これがわたしたちの 2 人の存在の実体を支える最高の関係の構造で、この関係の構造こそ一番信頼にあたる関係構造で、これは夫婦になった時点から育ててきたものだと考えては間違いだということがわかったのです。

もう結婚する前に結婚する相手との関係が保証されているのです。それを自己の世界というのです。

自分の自己の中に結婚する相手と離婚するという可能性も含めてもう包み込まれているのです。ですから、離婚する可能性もあります。

実体がない、つまり関係性だけですから、結婚の解消もきつとしやすいのでしょう。でも関係性というものを抜きにしては未来において何の信頼に足るものもないということがわかったということは不思議な価値観でしょう。不思議な世界ではないでしょうか。

今ある関係を大事にしなさいということなのです。

会社の人間関係、ビジネスにおける人間関係に絶対に偽善を持ち込まない。

そうすると今ある関係の延長上で素晴らしい人と出逢えるということです。

今ある関係の先にしかない関係との縁故でしか、未来がつかれないからなのです。
分かりますか。

今すでに自分と関係を結んでいる相手との関係性だけが手がかりで、未来に新しい関係が生まれてくるはずなのです。

ですから、今ある関係を大事にしないと、その先の、その先で、ご縁ができる関係性が、良い関係にならなくなるのです。

今結婚している相手と最高の関係を結んでいるから、死後どちらか死んであの世に行きますけれども、人間はまた生まれてきますから、輪廻転生は科学的にほぼ間違いないと言われているのです。

それで、また生まれてきてまた結婚しなくてはいけないから、その時の為に、この世で一緒に夫婦で暮らしたら、この関係を最高のものにしておくことが未来をより良いものにするのに非常に役に立つようです。

今のご主人を大事にする。今の奥さんをまず大切に差し上げて、これは二人の愛情がその関係を保証しているのではなくて、その以前から、結婚する前からの自己の世界にいた妻なのです。

出逢う人はみんな自己の中に同居している自己人格の中に、多数の自己でない他人が同

居しているのです、という話をよく申し上げますが、その話になるのです。

つまり、自己の世界で結婚する相手と、既にもう関係ができています。

夫婦はそもそも他人同士なのに物凄く上手くいく場合は上手くいくのです。ですから「結婚してからできた関係」などというものはそのように根拠が薄いのですから、そのように深い関係にはならないのです。ところが夫婦ときたら、まるで親子よりも夫婦の絆のほうが深いのですから、親子は一世、夫婦は二世というでしょう。親子より夫婦の方が大事だという意味です。

ところが普通の人は、夫は妻を軽く見るし、妻は夫を重く見ていないでしょう。

今は、親子の方がまだ絆が深いぐらいに思っているでしょう。

これは明らかに間違いなのです。

親子より夫婦の方の絆が大事なのです。夫婦の絆が大事なことによって、親子の絆が保証されるからです。本来はそういう流れの中で親子の絆というものは次に出てくるテーマです。

「お父さんとボクとどっちが大事？」って男の子が聞くのです。

「ボクとお父さんとお母さんはどっちが大事なの？」って5歳ぐらいから5年生ぐらいまでの年齢差はありますが、「お父さんとお母さんは、お母さんはお父さんが主人だから夫だから大事だけど、ボクは子供だからやはり大事なんだけど、お母さんから見ると、どっちが大事なの？」と子どもは聞くのです。

すると、現代のお母さんは天井を見てしばらく考えて、「ボクが大事に決まってる」と答えるのです。すると子供は、「困ったことを言う人だなあ。この人は」という顔をするのです。「何を言っているんだ。お父さんの方が大事だと答えなきゃいけないのに、この人あんまり賢い人じゃないな」と困惑するような、まことに不思議な表情になります。

お母さんはそれを知ってか知らずか「お母さんに任しときなさい。あんたは何にも心配することはない。お嫁さんだって、お母さんが決めてやるから」。すると子供は、「それが要らんことだと言っているんだ」と。これが分からないのです。

それで子供が「お母さんねえ、そんなこと言うけども、お父さんの方が大事じゃないの。」と言うと、母親がよく分からないのです。そういう価値観の勉強をしていないからです。

それで、お父さんの方が大事だと答えてくれたら子供はもう本当にうれしそうな顔を

て、「お母さんは良かったねえ。お母さんは幸せなんでしょう」と言うのです。

そしたらお母さんは、「もちろんよ」。子供は「ボクよりお父さんが大事だっていま言ったね」 お母さん「言ったよ。悪かったかい」 子供「いや、悪くない。それが正しいと思うよ。お父さんとお母さんの関係性が大事なんだよ。長生きしなきゃね」と子供の方がわかっていたりするのです。

これは人間には非常に面白いところがあって、子供はそういう時に、ボクが大事だなんて言われたら子供の方は悩みだすのです。「そんな、ボクが大事なんて言われたってうれしくない。」何故うれしくないかと言うと、やはり人間は、人間として自立できる為にはお父さんとお母さんがどんなに深い愛情で結ばれているかということを知った時に、子供は自立が始まるといわれているからです。

すると、子供は「じゃあ、ボクは旅に出るよ。」と言うのです。「何よ。旅に出るって。」
「いや、だからこれで旅に出ても良いよなあ。お父さんとお母さんが仲良くしてくれれば、いつ帰ってきても大丈夫だもんねえ。安心して旅に出るよ」子供はお父さんとお母さんが離婚していたら帰って来られないと思っているのです。自分は帰って来る家がなくなると思っているみたいです。

ですから、「お父さんもお母さんも元気で共に居てくれる家がずっと在るんだから、ボクはもう『安心』だ。」というわけです。

自立できる子供というのは、お父さんとお母さんがどんなに仲が良いか、深いか、ということを確かめた子供だといわれているのです。

そういう考え方は昔からありまして、それはひとつの形而上学的な信念なのです。

夫婦の絆がどれぐらいに大事か。それはもう「別れたらおしまいだ」なんていう発想が出てきたのは近代になってからですから、それまでは結婚したら一生妻を大事にするというのは普通です。

勿論、そうではない、倫理的・道徳的ではない、程度の低い野郎も昔もいっぱいいましたがそれはただ単に間違った夫婦です。間違った生き方をしている夫婦で、そのような夫婦の絆の大事さを子供に教えることができなくては、大人ではないということだ思うのです。

このお話を聞いて、私はそのような親で在りたいなあ、と思われる方がいたら素晴らしい。

それはご夫婦の協約ができているというか、高い価値観での協定が結ばれている。

それは結婚ということが如何に重大な意味を持っているかということを、やはり子供に

も語って聞かせられる大人だということでも大事な意味があると思います。

この要素と要素の**関係性と連動性**から、緊密な**相互作用**が起き、新しい秩序が形成される。ここでは、小さな要素のわずかな（ゆらぎ）でも、他の要素との**連動**によって**増幅**され、全体として大きな**変動**が現出したりする。

しかも、その**全体**の変動が、また、**要素同士**の相互作用に影響を与え、かくて、相互互換的に自己組織化が進むのである。この相互作用においては、**部分が部分の中に入り込み、全体が部分の中に入り込み**、それぞれ緊密に**絡み合っている**から、その過程を**要素**に分解することはできない。そのために、小さな部分の**わずかな変化**が、**全体の大きな変化**を呼び起こし、**新しい組織や形態**を自立的に創発させることにもなるのである。これが相互共存の原理のひとつであります。

別添資料 9 ページ

③相互共存の原理

■自己組織化の機能によって存在が保証される

自然に包まれたいかなる個体及びサブシステムにおいても、例外はあり得ない。あらゆる存在は、自己組織化の機能によってその存在が保証されている事は、既に度々にわたり先述の通りである。それでありながら、決してその個々の個体が無限に拡大したり成長したり、独善的な支配欲を暴走させたりする事は出来ないように設えられている。そこに、相互共存、相互関係性の原理が活かされている普遍的な理由がある。

みなさん、アブラムシいわゆるゴキブリです。ゴキブリの繁殖力はものすごく強くて信じられないような数のゴキブリを増やしていく。子孫を一気に増やすのですけれども、あのゴキブリだって無際限に数をどんどん子孫を増やすことは出来ないのです。関係性の構造がそれを許さないのです。関係性の枠組みが自然**(全体)**に決まっているのです。

ですから、自己組織性の力だけで自己組織性は機能しないのです。

もし自己組織性だけの力で自己組織が成立していくのなら、あのアブラムシは無限の生命力を増殖させて、もう人間の数をもちろん上回る、人類のこの地球上の生存を許さないほどのゴキブリは、ゴキブリ大武力帝国をつくることになるのです。

人間がもうゴキブリに負けてしまうぐらいのすごいエネルギーを彼らは持っているのです。でも**関係性の原理**でカチッと力任せにただ増殖したらそれが常に保証されるかという

と、そんなことは絶対にないように宇宙の構造の仕組みができています。それが相互関係性の原理の普遍的ないい意味の影響力がきちんと活かされているという為に、あのゴキブリがどんなに繁殖力が強くてもゴキブリだけが自己組織的にのみ、関係性の原理から拘束されないで活性化したら、そうなりますけれども、全ての動物を食い破って彼らの帝国ができるはずなのですが、そうならないような関係性の条件をきちんとはめてありますから、ゴキブリの暴力にも人類は倒されずに済んでいるということなのです。

決してその個々の個体が無限に拡大したり成長したり、独善的な支配欲を暴走させたりする事は出来ないように設えられているという。そこに相互共存・関係性の原理が活かされる普遍的な理由がある。

もし、この摂理（相互共存の原理）に異を唱え、挑戦したとしても成果に結びつかず、フィードバックの過程に従わざるを得ない状態に至るのは、まことに不思議なメカニズムであります。つまり個人の願望を達成する欲望がいかに巨大であっても、それだけの条件では、その願望は達せられないのである。何故なら宇宙空間に包まれる一切の存在が、宇宙を構成する万物との協調的關係性（相互共存）の中でしか、その場所に存在する事が許されていないからであります。

別添資料 10 ページ

[3]有機体的システムがもたらす多様性価値の原理

■多様性価値の原理とは

有機的システムがもたらす多様性価値の原理とは、万物の個性が主体的能動的に関係し合う相互間の協力は、間断なく万物の価値を創造的進化へと促す。それは文字通り統合的進化と謂う他はない壮挙である。

囲みの中の文章に目を通して下さい。多様性が更なる多様性の価値を生む。無限に多様化された個体が、更に相互補完の協働により、一層多様な個性を生む。すべての原子から人間まで、あらゆる種に於いて、ふたつとして、同じものは存在しない。様々な価値が共存し活発な相互作用により常に新たな価値が創造される仕組みになっている。

ここで言いたいことは、無限に多様化された個体が、どんどん拡大充実する形で、多様性を更に一層豊かな多様な生命が存在しないと高度な生命体が生まれてこないということを行っているわけです。

自分にとっての自己と他者にとっての自己の統合という話が次に出てきます。相互関係の世界では、事象どうしが互いに共通性を見出すと同時に個性に於いて相異なっていないなければならない。生命体に同化と異化の両作用が備わるのと同じで、相互連関のもとでは差異性と同一性が同時に存在することに注目しなくてはならないのです。

自己の世界で、「自分にとっての自己」と「他者にとっての自己」が統合されているのが自己の世界の特徴です。

その自己に目覚めていないと人間は駄目になります。だから自分と異なるもの、自分と対立するものすら受け容れていく。それを主体性といいます。

受け容れにくいものを積極的に受け容れる行動がとれ、事実その関係にしっかりと結び付けていける人。そういう人を優れたリーダーといいます。

その人は、自己の中で自分と立場が異なり個性も違う、そういう自分を自己の中で既に受け容れている事実があるのです。

それが事実そのものなのだという確信があるから、自分が相容れないもの、自分がどちらかという受け付けにくいものまで受け容れていくことが、ビジネスの世界において成り立つのです。

嫌いな人はやはり嫌いなだけけれど、その人を価値あるものとして関係性の立場で受け容れていくということです。

自分の個性で考えれば、こういう個性のある人が望ましいけれども全く違い、対照的な個性を持った人とも違和感なくお付き合いが出来るようになっていく根拠を、どこに求めたらいいか。それは自己人格に求めたら良いということなのです。

つまり、自己人格の自己の中には無数の他人が同居しています。その他人と人生で出逢うのです。

ですから、この自分の自己人格の中の私という自己人格を構成させるうえで必要な、無限大の他人の人格が自己の人格の中に共存しているのです。

ちょうどこういうことです。細い1mmの10分の1ぐらいの細い銅線を、こよりをよるようにして太い銅線にして、それを例えば10本つくる。その10本で1つのこよりをよるようにしてつくった銅線が段々太くなるわけです。最初は細い1本の銅線なのですが、6本ぐらいを1つにまとめてよっていく。

大体同じ太さでより上がっていくと、それを又1つにして巻いて、次に又6本を1つの銅

線として巻き、その次又6本を1つの銅線として巻いて太い銅線にしていくわけです。その太い銅線を更に太い銅線、更に太い銅線になっている構造が、自己人格の構造と非常に似ています。

そういうイメージで自己人格を理解することが出来るのです。

実は1本1本が他人で、その他人が集まって自己という人格が関係性の構造によって成立している。

自己人格とはそういう人格なのです。

ですから、例えば、初めて会った人に対して、メンバーが「ちょっとあの人は警戒すべきだ」と言ったとしたら、それを聞いた優れたリーダーならば「警戒はしながらも私は受け容れていきたい。本当に警戒しなくてはいけないかどうかを私は自分で確かめたい。私に任せてくれないか」と言うのです。

すると、メンバーが「リーダーがそう仰るのなら大丈夫だよ。私達のリーダーなら、ちゃんとあの人の本質を見抜いて、最も適切な対応をしてくれる。その代り私たち助けますよ。我々の中に、リーダーがちょっとでも期待できそうな人間が一人でも二人でもいたら、リーダーから名指しで『おい、お前手伝え。お前とお前も手伝え。俺のそばにいていつも相談に乗ってくれ。俺一人では、やはり判断に狂いがあっちゃいけないからな』と言ってくれたら良いんです。」と言います。

リーダーはそういう声をメンバーから聞いたら、「じゃあ、それならあんた達も安心だろ。私も安心だ。だから、ちょっと私がそういう面では立派だなと普段から一目置いている人がこの中に3人いる。その3人を皆さんの前で指名したい。指名された人がもし、『いや、私はそんなことでお役にたちたくない』とか、『そんなことで気苦労するのは嫌だ』ということなら、『私はお断りします』と言ってくれ。」と一言断って、リーダーが3人の人を選ぶのです。するとメンバーの皆がどう思うか、「流石だな、選ぶ人をちゃんと選ぶんだ。」ということに驚くというお話なのです。

その上司が大事な責任を伴う決済の時に意見を求めるために集められたこの3人は、一緒に仕事をするように机も比較的近い所に並べ、お互いに必要な時に助け合う。

上司が必要な時に彼らを「使う」のではなく、お互いの仕事に、お互いが活かしあえるなら、喜んで助け合おうというスタンスで付き合う。関係性の性格をそういう内容にすると非常にうまく行きます。うまく行っているところを皆が見てまた安心でき、「ちょっと自分たちは心配し過ぎたのかな」となるか、それ以外に何か理由があるかはそれぞれの事情であって良いわけです。

そのような時に、非常にハッキリするのです。

そういう経験をしたら、「あっ、自分の中に他人が同居している」と、自分の責任の下に
その他人とどう付き合うかという問題が出てきます。

それをトータルしたら自己になるのです。

その自己という人と一つのトータルした自己人格と自分がどう付き合うかという問題と、
たくさんの人格が含まれているのですが、ハッキリこの3人の人格が含まれているという
ことがもし予め何かの事情を通してわかっているのであれば、非常に対応はしやすいとい
うことです。

個性のある3人の意見を聞いたらいいのです。一人の人格を代表して喋る説明より、その
3人の一人ひとりから聞く。それを統合した一人の人格者としての一人ひとりの意見も聞
けるとしたら、それは非常にありがたいことです。イメージーションが非常に湧きやすい。
自己人格というのは、そういう意味の他人が同居している自己です。たくさんの他人が同居
しそれが一つにまとまって、自分一人の自分の自己人格になっているということです。

他人との関係が最高の状態になった時に、それを日本語では自己同一性といいます。

「自己同一性っておかしい言葉だな。自己って一人で一つに決まっているから、自己を同
一性なんて断らなくたっていい。」と思われた方がいるかもしれません。

自己には他人が同居しています。しかも数えられないぐらいの他人です。それが1つの自
己の中に納まっているということは、この実体は、普通常識では考えられない大変なエネル
ギーであり、その膨大なエネルギー量がこの中に約束されているということなのです。

それを自己同一性、アイデンティティといいます。

アイデンティティとは、自己は一つである。

他者がこんなにたくさん含まれているのに、一つの人格として完璧な調和の関係性で成
立している。

だから自己人格は物凄く立派で間違ったことはしません。人には非常に優しく、自己に優
しいのです。自己の中に含まれる無数の他人の一人ひとりに優しい。

それが自己人格という人格です。

そういう人格を持っている自分であることを確信できた時、この人は素晴らしい価値観
の持ち主だということになるというお話です。

我々は、他人から素晴らしいと羨ましがられるような人格を自分のものにするために、自
己と向き合い続けなければいけないのです。

向き合うとは、「私はどこまでの人を入れたら他人になるかという他人とは、そこに何人

ぐらいの他人を他人と想定しているのですか？」と聞かれて、どう答えたらいいのかと思いましたが、無数の他人になるのです。

100 人、1000 人、10 万、100 億や 5000 億でも足りません。

何故かという、この地球という惑星に人間が誕生し、どれくらいの人が歴史上に誕生したかなのです。ホモサピエンスの現代の人間から、これは数えられない人の数です。その人が全部私の自己の中に含まれているという意味です。

つまり、関係性においては他人と自分との区別がないのです。

他人と自分が常に深く関わって一つの行為を行い、一つの決断を共有し、一つの責任であるかのように二人が協力する。

対立する全ての人々が一致協力できる体制を私たちは理想と考えているわけです。

そういう自分自身の中に、理想の事実があるかないかを、自分が確かめる責任もあります。それが自己と向き合うという自己人格の世界なのです。

そういう世界は、物凄くファンタジーな世界で、なにか夢っぽいというか、夢か幻かというような世界と思われるでしょうけれど、それを真面目に確信できる。そういう自己のあり方を色々なイマジネーションで創発させてきた歴史です。だから神様も自己の中に入ってくるのです。

皆さん、ジャン・バルジャンの映画を見てください。如何に宗教に高潔な願いが込められているか。神様という言葉には重い重い意味があります。悲しい思いが込められているわけです。人間は現実と闘って生きていくのですから、神様でなければ救えません。神様ほど人間に優しい存在はなく、「じゃあ、あんたは仏教なのに、どうなってるんだ？」と言われたら、私は都合よく「仏様」と、いつでもパッと置き換えるのです。神様も仏様も同じ人格だと私は思っているからです。

私どもは難しく言うと、これを久遠本仏というのですけど、これは特別な仏教的な表現で、そういう人格を私たちが信じていなければ信仰になりません。自分の心の中にそういう仏様や神様がおられて、正しいことをきちっと選択できるように私を支えて下さっている。

だから神様に相談できるのです。

相談できる人がない人が立派な人だというのが近代的な歪んだ人間観です。

私に言わせたら、相談できる人がいない人間なんて最も不幸な人です。

「お父さんは誰に相談するの？」「神様」「あー、やっぱり。良かったねお父さん。そう、お父さん、神様がいるんだね。お母さんは？」「お母さんも、神さん」 息子「いやいや、

人まねは困るよ」と、子供から「他にないの？」と問われれば、お母さんが「お父さんの神様とお母さんの神様は神様が違うの。人まねではないの。だから、これでいいのよ。」と言えば子供は納得します。

自己の話を聴いた時から、自己と向き合い「自己の中に尊敬できる自己人格を見つけましたか？」と、自分で自分に問いかけ続けなければいけないことになっています。

「自分が心から尊敬できる自己を自己の中に見出せましたか？」ということです。

自己の中から尊敬できる自己を見つけた人しか、出逢った他人を尊敬したり、他人の中で尊敬できる人に出逢えないことになっているのです。

尊敬できる人に出逢ったその尊敬できる人は、自己の中に住んでいる人です。

この地球上に誕生した全ての人は自己の中の私ですから、尊敬できる人に出逢ったら「あっ、この人は私の自己を支えてくださる人だ」と思うのです。

そうしたらもう本当にこの人のために尽くしてあげたい。ご恩返しをしなきゃいけないという気持ちにさせられます。

だから出逢った他人で、どれだけでも尊敬でき、信頼できるという人がいたら最高です。

なかなかいませんがたまに見つければもう、その尊敬できる人を大事にする生き方に変わります。変えなければいけないのです。

自己の中に尊敬できる自己を見つけた人しか「この人のために自分は生きていきたい」と思えるような人に出逢えません。自己の中に尊敬できる自己を見つけている人は必ずそういう他人との出逢いの中から、他人の中に尊敬できる人を見つけることが出来るのです。

もう一つ。

自己の中に尊敬できる自己を見つけた人は、出逢った他人から自分が尊敬されるようになります。だから自己人格についてのお話を繰り返し聴いていただく必要があります。

この自己人格の話は、思想や哲学の世界でしか出てきません。

自己の中に存在する自分は、自己人格を成立させるうえで一番大事な人という意味です。思想的に深い人という意味です。

そういう自己を自己の中から見つけられないと、私たちは自己尊厳性に強い信念は持たないで終わってしまうのです。

それが人間として一番不幸な人生になるということです。

統合の構造は無駄とロスを排除する。自然は、多様な個体が相互の関係性を通し、間断なく新たな創造的価値の世界を創り続けてきた。そして、その過程で、エネルギーを物質へ、物質をエネルギーへと、無限に転換させた。それにより多様の主体性と相互関係性の価値創

造に貢献してきたのである。

別添資料 11 ページ

①多様性の原理

(1) 人間の価値は個性にある。真に個性と言えるものは、他人との最高レベルの関係性の中でしか鍛えられ生成されることはない。

(2) 宇宙に包まれた万物を科学の知見で観察し判ったことがある。この宇宙間に存在する一切の万物に、ひとつとして同じものが存在しない事実である。宇宙は多様性の価値を知った上で創造したのだろうか。

宇宙そのものが宇宙の中にあるすべての万物を創りました。

宇宙は宇宙の万物を創る時に同じものは二つ創りません。

それは尊厳性が消えてしまうからです。

一つしかないから尊厳性が自覚できることになります。

人間を誕生させる時の神様の想い、願いは人間の尊厳性の為に同じ人間はつくりません。動物でも同じ動物はつくりません。犬は犬でも毛並みが違ったり、顔の表情が違ったり、顔の目のあたりの犬の可愛い表情が全て違います。差が異なる差異性が犬の存在価値、尊厳性です。

(3) 宇宙にとっての成長(進化)には、定量的範疇に収まるものはひとつもない。それは人間の質感でしか捉えられない意味や価値を通してしか把むことが出来ないものである。今後の 21 世紀における企業内の課題の多くは、量ではなく質がテーマになる。

成長、進化というものは、一つ、二つ、三つ、四つ、五つと定量的な物差しで推し量ることが出来ないということです。

朱鷺は日本の国のシンボルの鳥ですが数が少なくなっています。その朱鷺の存在を確かめる為に五匹見つけました、六匹いることが確認できたと、数で特定しても、命の本質、成長、進化の特定は、そのようなわけにはいかないと私は考えるのです。

宇宙にとっての成長、進化は定量的範疇で説明ができるものは一つもありません。

成長や進化は生命ですから人間の質感でしか捉えられないのです。生命は意味や価値を通して質感でないと捉えることが出来ません。定量、数字で客観的に捉えようと思っても命

の実体には迫りきれないという意味です。

生命の実体に人間が迫るなんていうことは簡単、単純なものではありません。

生命は成長、進化の意味や価値を通して人間の質感でしか捉えられないもので、数字では捉えられないのです。

「今後の 21 世紀における企業内の課題の多くは、量ではなく質がテーマになる。」とは

その質感をテーマにして会社の中で、「私たちのこの商品が何故売れないのだろう？どこに理由があるのか？」という議論が必要になってくる時代ということです。

別添資料 12 ページ

②多様性の原理

■「全体」と「部分」について

全体と部分は、対立しながら、相互に限定し合い、生成変化していく。新たな世界の生成は、全体と部分の矛盾葛藤から起きてくるのである。複雑系は、部分と部分が相互に限定し合い、全体と部分もまた相互に限定し合って、自己自身を形成していく創造的体系（システム）なのである。

世界は、どの成長段階を捉えても、多様性と関係性からなる複雑系である。多様な諸要素が相互に作用し合って、世界を形成するとともに、その世界が諸要素に映し取られて、世界は変動してやまない。われわれは、このような不斷に変化し続ける世界の一部である。世界は、刻々として新たな世界であり、片時も一つとところにとどまることはない。

世界は、間断なく自己自身を再配置し続ける動的な系（システム）である。世界は、そこにあるものではなく、絶え間なく生起する出来事である。宇宙、物質、生命、社会、あらゆる系（システム）の動的形成を探究する複雑系の科学の存在論的根拠も、ここに求められねばならない。存在は生成の軌跡なのである。

別添資料 13 ページ

③多様性の原理

■宇宙における自然システムの典型的な特徴

宇宙において、最も広く認められる現象のひとつとして、あらゆる多様な物質形態の存在がある。原子から人間、そして銀河系に至るまで、ひとつの種にふたつとして同じものは存在しない。同様に、それぞれの銀河系は、他の数百億個から数兆個に及ぶ銀河の中においても、それぞれ固有の個性があり、明らかにそれらが互いに区別できる特徴を持っている。この原理の恩恵を受けて、宇宙空間の中に巻き込まれたすべての自然システムが、独自性と言う個性を発揮できるのである。

宇宙における自然システムの典型的な特徴、それは物質とエネルギーの相互互換の無限的繰返しによって変化する関係性の場を通し、間断なく古い価値を新しい価値創造へと転換する働きである。その際の変換のプロセスにおいて、新たに無駄が加えられたり、浪費（ロス）が生じることは一切あり得ず、そこに、自然そのものがもつ、常に最小のエネルギーで最高の価値を創造する仕組みを見てとることができる。それは即ち、自然界の物質とエネルギーを完璧なまでに節約しながら創造的に再生産しつづける姿であり、その明らかな証明こそが、宇宙全体に生きづく豊饒な多様性なのである。

高次元の講義の筆耕を担当してくださっている
K事務所の所長先生からのメール(鏡文)より

いつもお世話になっております。

第5期 第5講 「補講」＋「質問会」Ⅱ① 筆耕分担のK事務所担当分を送ります。

今回は特に P21 からの参考思慮にあった、
楠本事務所の皆さんの「週目」でのやり取りの内容を見て、正直言って心底驚きました。

楠本先生抜きで、社員同士だけでここまでのやり取りがなされている事を知って、
愕然としました。

P51 筆耕して、・・・

この素直な学びの継続が「思考力」を本物とし、「人間の価値」を不動にする。

そこに確信の信を置いて、「自己革新」する為に、これからも命ある限り筆耕メンバーを続けさせていただきます。

前は、毎週番のやり取りでしたが
今回も、直近の、
今週の月曜日(10月14日)の週番からのお知らせと、
Kアライアンスの関係先に「お知らせ」した内容の一部を
参考までに掲載します。

経営人間学講座で、講師である竹内日祥上人様が、
受講する我々(私)に、
経営に於いて求められていたものは、一体、何か？
それは、



今週(10/15~10/18)の週目について

楠本全社員

【週目】

「個人 PL」の作成に必要な、自立に向けてのコストを明らかにして、あらためて K アライアンス(全体)との関係性を思考する。

【背景】

今までの週目では理想と現実とのギャップを明確にし、現実を巻き込む思考と行動をリアルな売上へ転換するために、行動に出れていない、進められていない問題を各自、明らかにして来ました。そして、その問題から自分の仕事の捉え方というものをチームで対話しながら、「貯金箱」見直し・進化して来ました。貯金箱の進化の継続は続けていきますが、新たな売り上げ=付加価値に対する考え方というのは共有できてきたと思います。

そこで、今度は自分の会社に纏わる経費についての考え方を皆で思考して、共有していきたいと思います。まず人事委員会で作成してみた個人 PL を参考にしながら、今週は、K アライアンス(全体)への支払いの共有資産についてと整理していきたいと思います

資料には ・看板料 ・税理士押印料 ・代表への相談料 ・総務
というものがあありますが…ここに他に共有資産はないのか?例えば、ソフト料等あげるべき項目など…を思考していってください。私自身が個人 PL の作成に着手すると、自分の売上を上げる事だけを考え、経費を如何に減らすか?ということに縛られ、関係性を断ち切るような思考に走っていく恐さがあります。もちろん数字的に自分がいくら稼いでいかないといけないのかというものを認識するのも必要です。でも、この思考のプロセスで、Kアライアンス、組織にどれだけ支えられてきたのかを私自身、メンバーお一人おひとりがその人なりの振返りを持って気づいていたらよいなと考えております。

【進め方】

火曜日)は個人で項目の洗い出し

水、木曜日)メンターチームで開放、チームごとに項目の整理

金曜日)そのプロセスの共有のために発表

藤永さんは、日替わりで各チームに入ってください。

チーム1:白川チーム:松下、中村

チーム2:城石チーム:河村

チーム3:松浦チーム:篠崎、井上

資産管理は戦略総務の仕事ですので、最終的に総務が一旦とりまとめます。各チームの総務メンバーそのつもりで、記録・とりまとめをお願いします

[2022.4~2023.3 個人 PL 経費固定費付 \(名前\) .xlsx](#)

【楠の木会】全員への注意喚起！
採用募集のトラブル「同様手口」が複数発生！！

2024/10/09 (水) 8:00

Kアライアンス

Kアライアンスメンバー 様

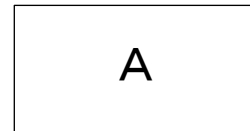
おはようございます！

楠の木会事務局 城石です。

今回は**注意喚起**です！

先日、クリニック経営の院長先生から、
私の携帯に連絡があり、

「税務会計の事では無いのですが
困った事が起こりました！」との事。



「どうしました?!」と内容を伺うと…

①人員不足で「新たに募集しようか」と
悩んでいた所、ちょうど
求人・転職サイト運営会社から営業の電話あり。
(私もHPを確認しましたが、
体裁はしっかりした会社にみえます)

②「掲載は3か月無料ですので『お試しで』
登録されてみませんか？」
「ただし、条件として、簡単なアンケートに
ご協力頂きます。一応3週間以内の返信と言う
期限だけご了承下さい」
と言われた

③無料で検討できるし、良い話だと、
申込書に記載し送付。
早速サイト運営会社から

「ありがとうございます。
アンケートは弊社から郵送させていただきますね」
と言われた

④その後、通常の診察・治療の忙しい毎日で
3週間の期限を、忘れた頃、
ギリギリに、しかも連休明けの
忙しい時にアンケートが到着。
（レターパックにて、到着日は
サイト運営会社がきっちり把握）

⑤連休明けで忙しい1日を経過後、
サイト運営会社から電話があり
「アンケート期限が過ぎましたので
有料になります」

⑥お試し無料期間内に効果が無ければ
止めようと思っていたのに、
最低でも **130万円のコスト発生**に！

この内容を聞き、
明らかに「**仕組まれた手口だ**」と思い
すぐに弊社の顧問弁護士に連絡。
忙しいスケジュールをこじ開けてもらい
院長先生とのWeb会議をセット。

相談当日、弁護士先生は開口一番
「実は、この手口は4件目です。
反社も関係しており、
プレイングマネージャー的な
経営者を狙った手口で、主にクリニック、
零細企業を狙ってきます」との事。

「公序良俗に反するので支払い
義務はありません！」と断言頂き
「スピードが大事ですので、まずは

受任通知を送りましょう！」と、
「全ての対応の委任を弁護士が受けた」旨と
「今後、サイト運営会社から、
クリニックに直接の連絡が1回でも行けば、
速やかに警察等に報告し適切な処置をとる」旨の
内容証明郵便を送付してもらいました。
(ほぼこれで解決するとの事)

はじめての事で、相当パニックに
なっていた先生も、安心されました。

お知り合いのドクターとも
情報共有をしたら、
「もう払ってしまった！」とか、
「裁判になった！」とか、周りにも
複数実例があったとの事でした。

まずは無料であっても、
よく知らない会社に何か依頼する際に、
注意をする事が第一ですが、
「社名や電話番号」と、「口コミ」と
検索かけると、その会社の実態が
わかるケースもありますので、
お試しください。

また、
このような想定外の問題があった時、
まずは落ち着いて
「楠の木会」というワードを思い出し
事務局までご連絡ください

A =

つまり、税理士(各受講者の職業)にとって

事業の出口の問題等、関係無い
詐欺の問題等、関係無い
資金会計・経営会計等、関係無い
思想・価値観等、尚更、関係無い

↓ 何故か?

私は、税理士(各自の専門分野)だから

それらは、

税務会計・税務申告では無い!!から

ここで、重要にして、重大で
且つ、物凄く大切な事は・・・

2024 年 10 月 11 日(金) 16:00～ イブニング・ニュース より

(ごく一部のみ抜粋)

■ Kさんからの報告

やはり言った通り、次は母上との関係に大きな一歩（安心技）彼女と合わせ技で**一本！**

・2年前は父親からも、母親からも、Kへの不安から信用0！からの、返し**一本！** □

・次は部下、そして上司、そして福岡、そして・・・

・辛く、悲しく、不安の現実（運命）、そこから問われている。応える責任。（A君）

・それは、それが、それと素直に向き合う事が、実は近道。壁が出てきた時(現れた時)、
“ああ～そうなんだ。” “なるほど。” “さて、どう観るか？” っと。

何故か？

それは私の世界、だから私の自由、私の手の中、私の宇宙、それは、私の意思（意志・意識）、パラダイム(価値観)

あなたの世界というものの正体は『あなたと言う**意識**』

あなたと言う**「観測者」**がいるから、**「あなたの世界」**を**存在**させている。

あなたが**観測しない限り** **「あなたの世界」**は**成り立たない**。

あなたの世界を、代わりに、私が観測したら、その瞬間に**「私の世界」**になってしまう。

つまり、

あなたが認識することで、初めて**「あなたの世界」**は、**成立**する。

問う。今！**「あなたの世界」**や如何に！

■ 情について

『情』とは何か、

『情』と、お上人様（高い価値観）との関係

『情』によって、『情』が**「苦」**を生じさせる。

一方で、

『情』が**「安心」**と**「豊かさ」**の根源となる。

『やさしさ』と『厳しさ』の統合とは？

- ・それでも、『縁』を切らない事が『情』なのか？
- ・だからこそ、『縁』を切る事が『情』なのか？
- ・私の『かわいそう』は、自我ではないか？
- ・徹底的（思想的）相手本位なのか？
- ・泣いて馬謖を斬るとは？（全体と部分の関係性）
- ・智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ・・・？

人間にとって、人間が人間として、最も人間らしくある為に必要なもの、それが『情』

人間だからこそ、この『情』は、だからこそ・・・。

〔場〕と〔状況〕と〔関係性〕によって異なる。
よって、
高い価値観によってのみ正しく活かされる。

2024年10月11日(金) イブニング・ニュースの10%～15%程度です。

ー 本日のイブニング・ニュース ー

※竹内日祥上人の仰る[学習組織体]を目指して

弊社(Kアライアンス)の、メンバー一人ひとりが[主役]であり、
一人ひとりが[大変な意味]のある
[重要な役割]を担う事になる。

それって! 嫌なのか? 嬉しいのか? どっちなのでしょう?

- ・その人にしか出来ない事
- ・その人だから出来る事
- ・その人以外に代われない人

あなただから、あなたしか出来ない、唯一。

女性・男性・年齢・経歴…そこで、思想との出逢い。

そして気付き(パラダイムチェンジ)。それは、あなただから

- ・各自、思想的私小説を書いて貰う

自我に基づく自分らしさではなく、思想的裏付けを伴う自分らしさ

この発表(自己の開放)が、公への貢献

それは、

自らの気付き = 思想的私小説 = 子に語る言葉 = 最高にして、唯一の渡すべき財産

それは、同時に社会貢献であり、組織(会社・家族)貢献であり、自己への貢献(責任)である。

私とは、一体、何者なのか? という事

死ぬときに、

『私は、どのように生を得て、育ち、そして高い思想と出逢い、そして何に気付き、だからこのように生きて来ました。』

来世も必ず、又、この日本に生まれ、出逢うべき人に出逢い、この続きを果たしたい。』
と言って、死ねるように。

新しいカタチの経営 (シン・共同体)

メンバーがお金を払う(全体を支える)ことで、

自らが支えられる(全体最適・部分最適の統合)

依存(サラリーマン)からの脱却。相互共存(依存)への参画(主体性)

つまり、

相互循環システム(関係性)の創造

私は、竹内日祥上人様に、一体、何故、出逢えたのか？

私は、竹内日祥上人様に、一体、何故、育てて頂けたのか？

今、気付いた事のふたつ…

■ひとつ

求めていた。

「求めている」ことに正直、素直だった。

求めるとは、一体、何か？

そして、それは何故か？

竹内日祥上人様から、尋ねられて私が語った事

- ・ 現業務(仕事)の具体的問題事例 → 単式簿記 → 複式簿記 → 税務会計の問題
過去会計の意味の無さ → 未来会計 → 資金会計(管理会計では無く) →
そして、経営会計
- ・ 業界の問題 → 資格者の問題 → 中小企業の問題 → 国家の問題 → 我社の問題
- ・ 少子高齢化の問題 → 地域創世の問題 → 中小企業の出口(承継)の問題 →
MAの問題 → 日本の問題 → 業界の問題 → 私の会社の問題 →
私の問題である → 私の問題解決は、国家の問題解決 →
問題解決は価値の創造 → 私の役割、私の目的(使命) → 私という存在理由
→ 高い価値観との統合 → 高い価値観(と)(で)生きる

■ふたつ

関係性

- ・ 妻からお上人様への、「ご注意!!」という大バカの、大勘違い!! (夫婦同次元の馬鹿)

- ・ 結婚を決めた理由について尋ねられて私が語った事

お上人様の言葉（高い価値観の学び）について、

私自身、お上人様が講演でお話しされていたこと、筆耕して、声のトーン、顔つき、表情、お上人様の立場で、お上人様の価値観を借りて、受け止めて、確認して、振り返って、初めて分かる内容。→ 皆さんも、既に一度、聴いているはずだけど、聴けていない、初めて聴いた。という印象ではないでしょうか？

それは、

つまり、

つまり、

そうだとしたら、それは何故か？

それで経営が出来る、と思っているから。

ここで言う「出来る」とは何か？

ところが、「現実」は

ということは、

有機体システム思考との出逢い



(経営人間学講座・高次元経営実践勉強会)



自己の振り返り(パラダイムチェンジ)=自己革新



運命轉換・現実変革



--



--





共同体の創造



新事業の形の創造



それは、

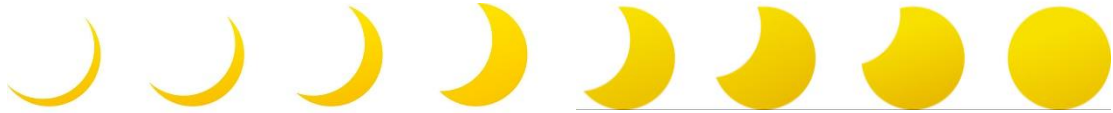
— ニルス・ボーアの言葉 —

【間違いを犯している】と思われるほどの【新しい形（カタチ）】である筈。

そこに向かって・・・共に・・・

★ 予 告 (希望) ★

太陰太陽暦(旧暦・本来暦)で行われる、
来年、令和7年「グローバル・経営者フォーラム in 九州」



新しい経営の力・タ・チ

高次元経営(教育の場・社会への奉仕の場・金銭の循環の場の統合)



有機体システム思考(統合学)



共同体



「ゲゼルシャフト」+「ゲマインシャフト」の統合



[パートナーシャフト]



目的の明示(具体的明確化)



問題の特定



新しい経営の力・タ・チ

()



固まらない・常に揺らぎ・蠢く 生命体

高い価値観を深く学び実践に活かす！

高次元経営 実践勉強会 第 4 期 DVD 販売決定！

「受講した内容を繰り返し視聴したい」

「大切な人(社員、ご家族、友人)と共有したい」

「高次元を知人に紹介したいが伝え方がわからない」

というご意見を多数いただき、第 4 期 DVD の販売を決定しました。

DVD セット

受講生
限定販売

全 8 講 定価:165,000 円(税込)

第 4 期受講生限定:82,500 円(税込)

※ご本人様の継続的な学習、大切な方々へ思想学習を共有し広めていただくために
お役立てください。そのため必ず購入者ご本人管理のもと共有いただき、
貸出しなどはご遠慮ください。

※高次元経営の受講生のみ購入可能な商品となります。

※HP より第 1 期～第 3 期の DVD も発売中です

■お申込みはこちら



<https://nipponteki.com/high-dimensional/dvd04/#form>

〈お知らせ〉

高次元経営 第Ⅴ期 スケジュール

第1講～第4講 終了

第5講	2024年8月23日（金）	本編③	[二]有機体システム思考がいかなる問題解決も可能にする ① システム思考(統合思考)に基づく問題解決 その1 ② システム思考(統合思考)に基づく問題解決 その2
第6講	2024年10月19日（土）	本編④	[三]経営現場における全体と部分の関係性による法則 ① 部門ごとに相互の関係性の法則が見直される ② 部門横断の境界的課題が抜本的に解決される ③ 専門間協力の全体的成果が補完協働により保証される
第7講	2024年12月18日（水）	本編⑤	『理 念』について
第8講	2025年3月3日（月）		補講+質問会Ⅲ

今回の講義

※講義の内容は現時点での予定です。その時の①世界情勢、金融情勢等々の動きによって②受講生からの

感想文や質問内容によって、タイムリーで適切なテーマに変更することがございます。ご了承ください

※本編の時間につきましては、当初の予定から変更する場合がございます

■感想文をご提出ください

その感想(気づき)が、あなたと同じ価値観を持った人との出逢いをつくり、
そのあなたの感想(気づき)があなたの最大の価値となります。
どんな間違いに気づき(これまで何を正しいと思っていたのか?)、
その自己との対話(言及)が
現実に必要な出逢いを創り出し、現実(環境)を変革します。

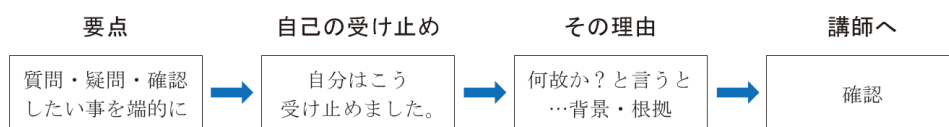
■質問について

学んだ思想をあなたの思考原理として実践するために
思想を通して言語概念化した問題意識を質問としてご提出ください。
頂いたご質問は、各講義又は質問会にてお答え致します。

リアルなビジネスの現場に於いて発生している不安や問題を
「質問」するために言語概念化し、
講師との対話を通して、自己と向き合うことで、
思想への確信が深まり、
実践するための思考原理の確立に近づきます。

是非、直接講師に質問できるこの機会を
学んだ思想を実践する為の確信を深める場として
ご活用ください。

『思想・価値観学習』に於ける質問の仕方



下記要件で、A4 2枚以内におまとめの上、Word(office)にてご提出をお願い致します。

余白：標準 フォント：MS明朝 フォントサイズ：10.5

※感想文と質問の提出期限と提出方法につきましては、最終ページにてご確認ください。

※受講生からお寄せいただいた質問等が多数がある場合は、全てにお答え出来ませんことを、
予め、ご了承くださいませ。

■本日のタイムスケジュール

13:00～13:30	受付・WEB 入室可能時間
13:30～14:30	前講（60 分）
14:30～14:50	休憩（20 分）
14:50～15:50	後講（60 分）
※以下参加希望者のみ（当日参加可能）	
16:10～17:40	GD(グループダイアログ)※ グループに分かれて対話を行います。

※申込されていない方は、当日受付に申し付けください。

受付にて、チーム分け及び会場をお伝え致します。

■感想文、質問については

後日メールにてお送りする様式に記載し下記 URL からアップロードし、
ご提出をお願い致します。

期限：11 月 5 日（火）10 時まで

<https://lstep.app/form/27848/fYIAjE/655572>

高次元経営 第 5 期

Q 検索

詳細はアーカイブ配信メールにてお知らせします。

お問合せ：一般社団法人 日本的経営研究会 事務局

Mail : info@nipponteki.com

URL : <https://nipponteki.com/>